
夜に咲く

桜耀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜に咲く

【Nコード】

N 8 1 4 9 0

【作者名】

桜耀

【あらすじ】

ごく普通？の高校二年生、咲夜さくやが戦国BASARAの世界にトリップ！？

憧れのキャラ達に囲まれて、なれない世界で必死に、でもそれなりに楽しみつつ生きる咲夜。でも、そんな咲夜には本人も知らない衝撃の事実が… シリアス、恋愛、ギャグ、ほのぼの・・・何でもありのストーリー！！

ゝプロローグゝ（前書き）

トリップ、オリキャラ、特殊能力等が苦手な方は逃げたほうがいいと思います。

この作品が初投稿なので色々と読みにくかったりするとは思いますがお手柔らかに…

くプロローグく

学校も無事に終わり、音楽を聴きつつ下校をしている最中のこと。その日、私はいつもの様にたいしたことも考えず一人で帰路についていた。

まさかその日が、運命が大きく変わる日だなんて知らずに……。

「くく学校も終わったし、帰って何やろうかな？ やっぱ巴萨ラ？」

お気に入りの音楽を聴きつつ鼻歌交じりで歩いていった私。

「つと……その前に」

私は大通りをそして、細い上り坂になっている道に入った。

この道はちよつとした丘の上に続いていて、その丘の上にはとても大きな桜の木がある。

むしろ、それ以外には何もないのでお花見シーズン以外はとても静かで良いところだ。

小さい頃にここを見つけて以来、妙にここを気に入ってしまった。冬場でなければここで昼寝するのが

日課のようになってしまった。

それは高校生になった今も変わらず、学校が終わった後に20分ほど

ウトウトするのがいつものパターンだ。

「よいしょつ……と」

太い桜の幹にもたれ、カバンを膝の上で抱えるようにする。

携帯のアラームを20分後にセットするとすぐに眠気が襲ってきた。

《やつとみつけた……》

眠りに落ちる寸前に、誰かの声が聞こえた気がしたけれど私は睡魔に抗うことができなかった……。

ゝプロローグゝ（後書き）

こんなものでよければ更新、不定期になると思いますがよろしくお
願いします。

第一話 出会い

小高い丘へと続く道を、幸村は馬で歩いていた。領地の視察に行ってきた帰りだ。馬上の幸村に佐助は歩きながら声をかける。

「たいしたことなくて良かったね。旦那」

「うむ。しかし、何かしらの支援はせねば…む？」

丘の頂上近くまで来たところで幸村が怪訝そうな声を上げた。その視線を追って、佐助もまた声をあげる。

「あ…。。」

「人間か…。」

「たぶん…けつたいな着物だけど」

二人の視線の先には、丘の上に生えている桜の木にもたれかかっている人影があった。

その人影は制服を着てかばんを膝のところで抱えるようにしている。どちらも、この戦国時代にあるはずのないものだ。しかし、この二人がそんなことを知っているはずもなく…。

「行き倒れであろうか…。」

「旦那…どうするつもり？」

「どうするも何も…もし真に行き倒れならば助けてやらねばならぬだろう？」

「もし敵国の間者だったりしたらどうするの？」

その的確な指摘にうつ、と幸村が返答に詰まっていると微かなうめき声がした。

二人の話し声で目を覚ましてしまったらしい。

佐助はとっさに身構えると幸村を後ろに押しやった。

「うん……え？」

7
 •
 •
 •
 •
 •
 8

ゆるゆると目を開けたその人物は佐助と幸村に気付くと驚いたように目を見開いた。

そして、こちらをうかがう様にして見ている幸村と、幸村をかばう様にしてこちらを睨みつけている佐助とを何度か交互に見比べた後、

「ええええええええええええつ!？」

思いつきり叫んだのであった……。

第二話 出会い 其の弐

気持ちよく眠っていた私は誰かの声が聞こえるのに気がついて目を覚めました。

どこかで聞いたことある声な気がするなあ、なんて思いつつゆつくりと目を開けると、そこには……“あの”幸村と佐助が立っていたんです。

「えええええええええええええええつ！？」

「うわっ！？」

「なんで？」

思わず思いつき叫んでしまった私に幸村と佐助が驚いたような声をあげてます。

そんな二人を尻目に私は完全にパニック。むしろ、これでパニック起こすなって言うほうが無理なんじゃないかと思うんですが……。

「ちよつ…ちよつと待つて！どうして幸村っ？どうして佐助っ？なんでBASARATツ！？…て言うかいったいこどコ！？」

「と、取りあえず落ち着くでござる！」

「そ、そーそー。ほら、深呼吸して？」

目の前の二人に促されるまま何度か深呼吸を繰り返す。すると、確かに落ち着いてきました。落ち着くと、冷静な判断ができるようになるもので。

そつと声をかけてきてくれた幸村に笑顔で返事を返すだけの余裕も生まれた。侮れないなあ、深呼吸。

「……落ち着いたでござるか？」

「うん。大丈夫。ごめんね?」

「気にしないでほしいでござる」

「いやゝホントごめん。あまりにもリアルな夢だからつい…」

「夢…?」「夢…でござるか?」

「え…?」

私の言葉に真田主従がそろって疑問符を飛ばす。その二人の姿にどこことなく嫌な予感がして不安になった。

「だってこれ…夢だよね?」

「………」

二人が顔を見合わせた。その仕草で私の中の嫌な予感は一層強くなっていく。

……こうなったら“あの手”を使おう。

「…ねえ」

「?」「何?」

「幸村でも佐助でもどっちでも良いから私のトコ思いっきりつねってくれない?」

「え?」「…ホントにいいの?」

「??」

どうやら佐助は私の意図をくみ取ってくれたようです。幸村は分かっているようですが。

私は佐助にコクリ、とうなずいて見せた。

「いい!もう手加減、遠慮容赦一切無くやっちゃって!」

夢の中ならば痛くないはず!

そう断言した私に、佐助はため息をつきながらも私の希望どりのことをしてくれました。

……そりゃあもう。とてつもなく痛かったです。

第二話 出会い 其の弐（後書き）

地の文がいまいち統一できてないですね（苦笑）
じきになれると思うので気長に見てやってください。

第三話 出会い 其の参（前書き）

実はこの小説、着地点が決まっていません。

・・・そんな訳で（どんな訳で？）緊急アンケートをおこないたい
と思います。

後書きでやってるので、協力してやってください。

第三話 出会い 其の参

痛い…。ほっぺがすごい痛いです。ジンジンしています。
自業自得といえば、そうなので、しょうがないのですが……。
それよりも、問題があるんです。

「痛い…。でも、痛いってことは夢じゃない…」

そう！これですよ！

痛い＝夢じゃない。

これが大問題なんです！だって今日の前には……

「大丈夫でござるか？」

「まあ、思いつきりやれって言ったのはそっちだしね」

“あの”BASARAの真田幸村と猿飛佐助がいるんです。

……普通、あり得ないでしょ！

？夢？だと思ふことで落ち着いていた私の脳内は？夢じゃない？と
分かってしまったことで大パニックですよ！

「ちょっと待って！どういうことッ！？夢じゃないなら、なんで目の前に幸村と佐助がいるの！？私は幻覚でも見てるの！？…って言うか、ここドコーッ！」

「ここは、信濃の国でござるよ」

パニックになっている私の叫びを聞いていた幸村が、唯一分かった
のである。最後の質問にだけ返事を返してくれた。
でも……信濃の国？

謝りながら携帯のアラームを止めると、佐助がピリツとした空気を
まとって聞いてきた。

佐助と幸村は明らかに警戒してるみたい……。って言うか私、警
戒されてる！？

……。もしかして、ピンチ？

第三話 出会い 其の参（後書き）

前書きの通り、アンケートしたいと思います。

票が一番多かったキャラをヒロインちゃんのお相手にしたいと思うので、投票してやってください。

以下、選択肢です。

- | | |
|-----------|--------------------|
| 1、真田 幸村 | 2、伊達 政宗 |
| 3、猿飛 佐助 | 4、片倉 小十郎 |
| 5、長曾我部 元親 | 6、毛利 元就 |
| 7、前田 慶次 | 8、誰ともくっつけず転生↓学園物へ！ |
| 9、その他 | |

…取り合えず、思いつく限りの選択肢を挙げてみました。

じつは、8番のネタはもう考えてあったりします。多少、死ネタが入ることになりますが・・・。

投票期間は、本編で伊達主従が出てくるまでにしたいと思います。

ご協力お願いしますー（・ー・）ー

第四話 状況説明

「……視線が痛い。」

さつきから、佐助の睨みつけるような視線がビシバシと直撃してま
す。

もし、視線に物理的な力があつたら、今頃二、三十回は死んでるん
じゃないだろうか、私。

幸村も警戒しているようで、助け船は期待できません。

「……………」

「あの…佐助さん？」

「さつきから思ってたんだけど、アンタなんで俺たちのこと知って
んの？」

恐る恐るこっちを睨みつけてる佐助に声をかけたら、厳しい口調で
質問されました。

「……うう、迫力がハンパないです。はつきり言ってしまうと、か
なり怖いです。」

と、言うかどこか敵国の間者か何かと思われているんでしょうか？

「一応言っておくと…間者とかじゃないですよ？」

「はい、そうですか。…なんて、信じると思う？」

やっぱりだ……。一方的とはいえ、知ってる相手に疑われるのは
キツイなあ……。

でも、説明しても信じてもらえないだろうしなあ……。自分でも
信じられないしなあ……。

なんて、遠い眼をしてそんなことを考えていると大体さあ、という
佐助の声が聞こえた。

「アンタ、何者？間者じゃないって言うんなら、俺たちのこと知ってる理由とか、そのけったいな着物とか、さっきの変な音とか、説明してよね」

「…説明しても信じてもらえそうに無いですもん」

「ふーん。そう」

思っていたことを返したら佐助があっさりひいてくれた。そのまま流れるような仕草で懷に手を入れるとクナイを取り出して……って！

「ちよつとタンマー!!」

「なに？」

「なに？…じゃなくって！そのクナイ！」

「…俺様としては、怪しい人間をやたらと旦那のそばに近づけるワケにいかないんだよね」

「…つまりは、説明をする気がないのならこのままやると暗に言っている訳で。」

そうなったら、説明しない訳に行かないじゃないですか。

私はまだ死にたくないんだ！

「分かりました！言います！説明します！だからそれ仕舞って！」

「佐助」

「へいへい」

幸村の声を聞いて佐助がクナイを仕舞ってくれた。とりあえず、助かった……。

「じゃあ説明しますけど、信じられなくても切り捨てたりしないで

くださいね？自分でも今の状況あんまり信じられない状態なんですから」

「うむ、そこは安心してほしいでござる」

「じゃあ、えつと…たぶん私、この世界の人間じゃないです」

「…どういうこと？」

「だから、幸村…さんと佐助さんは私にとってはゲーム…て言っても分かんないか。ええつと…」

割と、カタカナを使わずに説明するのは大変だ。ちなみに、二人に対して敬語になってたりするのは二人が（特に幸村が）こっちの世界では身分が高い人なのを思い出したから。痛いのは嫌だからね。

「ああ！そうだ。私にとって二人はお伽草紙の中の登場人物なんです」

「お伽草紙…でござるか？」

「はい。で、私はそのお伽草紙が大好きだったんです。だから二人のことも知ってるんですよ」

私の説明に幸村と佐助は複雑そうな顔をしている。

・・・そんな顔されても私も困るんだけどなあ。

「ならばなぜ、このような所にいるのでござるか？」

「それが・・・」

「それが？」

「私も分らないんですよ」

「…は？」「ええ？」

二人に胡乱げに聞き返されてますます困ってしまう。

だから、私自身あんまり分かってないんだってば！と心の中で思い

つつも説明を続ける。

「私はいつも通り、家の近所の大きい桜の木の下でお昼寝をしてたはずなんです。けど、目が覚めたらここにいて・・・」

「つまりは、なんでここにいいのか自分でもわからないって事？」

こくり、と頷いて見せると二人は押し黙ってしまった。それきり、誰もしゃべらない。

気まずいなあ。なんて思っただちこち視線をさ迷わせていたら、やっと幸村が口を開いた。

「…事情は、大体理解できたでござる」
「え？」

本当に、理解してくれたのだろうか？
そして、二人に状況説明をしていて自分で気がついたことがある。

・・・私、どうやって帰ればいいの！？

第五話 お世話になります（前書き）

後書きにてアンケート実施中!!

第五話 お世話になります

唐突ですが・・・

馬って、結構揺れるんですね・・・。何度か舌噛みそうになりました。

もちろん私は馬に一人で乗れる訳無いので、幸村の後ろに乗せてもらったのですが・・・。

ちなみに私は今、上田城の前にいます。

なぜそんな所にいるのかと言うと・・・。

あつ以下、回想です。

「…事情は大体理解できたでござる」

「え？」

本当に理解してくれたのだろうか？

と、言うか二人に説明していて気付いた。

・・・私、どうやって帰ろう。

「その様子だと、帰る方法も分からないのでござろう？」

「うっ・・・」

幸村に図星を言い当てられて思わず呻いてしまっ。

だってしょうがないじゃんよう。自分の意思で来た訳じゃないんだよう。

・・・まあ、確かに“トリップしたい”と思ったことは何度もあるけど・・・イキナリは、ねえ？

けれど、事実は事実。ここは素直に認めよう。

「…その通りです」

「ならば、元の世界とやらに帰る方法がわかるまで、某の城に滞在したらどうでござろう?」

「え?…ええつ!」

幸村の提案に私は驚いた。

だって、仮にも城主がこんなにも簡単に（自分で言うのもなんかアレだけど）得体のしれない人物を城に招き入れても良いのだろうか?…いや、駄目でしょ。だってほら、隣で佐助が厳しい顔してるし。

「旦那…」

「佐助、大丈夫でござる。お前も分かっているだろう?それに、某達に危害を加えるつもりは無いのでござろう?」

「!もちろん!」

幸村のセリフの後半、明らかに私に向けられた問いに全力で頷くと“ほら見る”みたいな顔をして幸村が佐助を見やった。

それを見た佐助が盛大にため息をついて首を左右に振る。

（・・・折れてくれた…のかな?）

いまいち状況が理解できなくて幸村に首をかしげて見せると、幸村が私の名前を聞いてきた。

そう言えば、まだ名乗って無かったつけ。私が向こうのこと知ってるから、向こうもこっちの事を知ってるような気になってた。

「咲夜さくやです。望月もちつき咲夜」

「咲夜殿…でござるか。某達の事は知っているのであったな」
「はい。…しばらくの間、よろしく願います」
「うむ」

回想終わり！

はい、こんな訳で私はしばらく上田城でお世話になることになりました。

あの直後に発覚したんですけど、私はどうも男と間違われていたようです。

どうも私は中性的な顔立ちらしく。元の世界では基本ズボンで生活をしていたのですが、大体男と間違われるか、どちらなのかさんざん迷われた揚句に結局は直接聞かれる…。

と言う事が多かったんですね。髪も短いし。（ちなみに今は軽く肩にかかる位です。）

でも！今は制服だからスカートなんですよ！

この時代にスカート無いからしょうがないんですけどね？

でも、やっぱりどつか傷つくんですよねえ…。

私の事を、幸村は完全男だと思っていて佐助は“なんとなく女の子…かな??”っていう感じだったとか。

ちなみに幸村の誤解は解いてないですよ？佐助の誤解だけこっそり解いときました。

だって、私が女だってわかったら女性が苦手な幸村とまともに話せなくなると思いませんか？

第五話 お世話になります（後書き）

詳しい説明は第三話にて。

←←選択肢←←

1、真田 幸村

2、伊達 政宗

3、猿飛 佐助

4、片倉 小十郎

5、長曾我部 元親

6、毛利 元就

7、前田 慶次

8、竹中 半兵衛

9、風魔 小太郎
へ！

10、誰ともくつつけず転生↓学園物

11、その他

ご協力お願いしますー（ー^ー）ー

五・五話 拾いもの

旦那が領地の視察に行った帰りにおかしな拾いものをした。
もちつきさくや
望月咲夜と言う人間。

なんでも、異世界から来たらしい。

詳しく話を聞いてみると、なんでこの世界に来たのかも、元の世界に帰る方法も分からない。

とか言う事で、真田の旦那が上田城に滞在することを勧めたんだよね。

最初は俺様反対したんだけど、結局は折れちゃったし。俺様が折れた理由は二つ。

一つは咲夜の旦那にあまりにも隙があり過ぎること。

もしも間者などであれば、無意識に急所へ攻撃が当たらないようにしてしまうものだから。

もう一つは、咲夜の旦那から、血の匂いがしないことだ。

この時代に生きていれば、たとえ武人で無くとも血や、火薬、死の匂いが纏わりついているものなんだけど、咲夜の旦那にはそれが無い。

まるで、身近な所で人が死んだことが無いような。

それは、この時代に生きていれば絶対にあり得ないこと。

きつと、真田の旦那もそれが分かってたからあんなにあっさり城に招き入れたりしたんだろうし。

「そうなの!？」

上田城まで行くのに、咲夜の旦那の分の馬をそこら辺から借りてこようと思っただけど…。

咲夜の旦那は馬に乗れないらしい。

「はい。私のいた所では移動用の機械カラクリがいくつも発明されていたので…。むしろ、馬に乗れる人の方が少ないですよ!？」

「考えられぬ…。」

「アハハ…でも、馬に乗れないとマズイですか？」

苦笑した後、不安そうに聞いてきた咲夜の旦那に旦那は“問題無い”と答えていた。

まあ、馬に乗れないなら旦那が咲夜の旦那を後ろに乗せて行けばいいんだしね。

旦那もそう考えていたらしくて、ほぼ同じ内容の事を咲夜の旦那に伝えている。

すると、咲夜の旦那が一瞬すごい驚いた顔をした。

その後すぐに何かに思い当たったような顔をしてため息ついたりしてゐるし。

「どうされた？咲夜殿？」

「え？ああ、はい、少し…」

「？」

「すみません。佐助さんちょっと借りても良いですか？」

「？構わぬが…」「…何？」

「ちよつと…」

そのまま俺は咲夜の旦那に服を引っ張られて旦那から少し離れた所に連れてかれた。

咲夜の旦那は旦那に背を向けて、かなり小さい声で喋り出すから、俺もつられて小声になってしまう。

「あの、幸村さんと佐助さんって私の性別どっちだと思ってますか？」

「…真田の旦那は完全に男だと思ってるね」

そうじゃなきゃ、「自分の後ろに乗せてく」なんて言い出す訳無いし。

「佐助さんは…？」

「俺は…どっちか判断しかねてる」

とりあえず正直にそう言ったら、咲夜の旦那がまたタメ息をついた。そして、「やっぱり」などと呟いている。

「もしかして、咲夜の旦那って女の子？」

「はい。ああ、やっぱ男だと思われてたか…。スカートはいてるのに…」

ブツブツと呟いている咲夜の旦那……いや、咲夜ちゃんか。

ブツブツと呟いている咲夜ちゃんをもう一度よく観察する。

今、咲夜ちゃんが着ている服は、少し大きいのか体の線が分かりにくい。

髪の毛も肩にギリギリかかる位。

なによりも、咲夜ちゃんはちょっとつり目で、キリツとした顔立ちだからどちらかと言うと“綺麗な顔の男”に見えてしまう。

でも一度女の子だって知っちゃうと、もう女の子にしか見えないんだよね…。

「旦那が知つたらどうなるか」

「っ！そう！それなの！」

「わっ！？」

「幸村：さんには言わないで下さい」

「いいけど…。いいの？」

そう問うと咲夜ちゃんはコクコク頷いた。

・・・本人がいいなら構わないか。

脳内でそう結論付けた所で真田の旦那がこっちに声をかけてきた。

「佐助？咲夜殿ー？」

「あ。ほら、旦那呼んでるし行くよ」

「あっはい！」

その後、旦那と咲夜ちゃんを馬に乗せ、俺様は一足早く上田城に戻った。

城に戻ったところでふと、気付く。

いつの間にか自分が、あの咲夜という少女に対する警戒を解いていたことに。

（はあ。まったく…）

これでは忍び失格だ。

本当に、これからは変なモノを拾わないように旦那によく言っておかないと。

五・五話 拾いもの（後書き）

長いですね（；――）

アンケートに協力お願いします。
詳しい説明は第三話にて。

←←選択肢←←

1、真田 幸村

2、伊達 政宗

3、猿飛 佐助

4、片倉 小十郎

5、長曾我部 元親

6、毛利 元就

7、前田 慶次

8、竹中 半兵衛

9、風魔 小太郎
へ！

10、誰ともくつつけず転生↓学園物

11、その他

ご協力お願いします>（――）<

第六話　夕焼け

皆さんどうも、咲夜です。

今、私は上田城の一室にいます。

上田城でしばらくの間お世話になることになったので部屋をあてがってもらったんです。

傾いてきた夕日が部屋の窓から差し込んでとっても暖か♪
きつと日中は日当たり最高なんだろうなあ。

そんな部屋で私が何をしているのかと言うと・・・

「ヒマだーっ!」

・・・暇を持て余していました。

佐助は私をこの部屋に案内してくれた後、すぐどこかに行ってしまったし、幸村は仕事があるとかで・・・。

かといってほかに知り合いはいないし（一方的に知ってる人ならたくさんいるけど）、勝手に出歩いて良いものなのか・・・。

部屋の中で暇をつぶそうにも音楽プレーヤーは持って来れなかったし、ケータイはいつ帰れるのか分からない状態で電池の無駄遣いはしたくないし・・・。

結局はできることが何も無いので

「ヒマー」

暇を持て余すしかない訳ですよ。

「せめて笛でもあればなあ。ヒマ潰せるのに」

そうそう。私、横笛が吹けるんです。自分で言うのもアレですけど

結構上手に。何度か賞状も貰ってるんですよ
私が人様に自慢できる唯一の特技です。

「はあ……」

どっちにしる無い物ねだりに変わりありませんね。はい。

溜め息をついてい草の匂いのする畳の上にデロツと仰向けに伸びてみる。

すると、今はあけられている鎧戸？って言うのかな？から、連なる山々と真っ赤な夕焼けが見えた。

「うわ……。キレイ」

こんな紅い夕焼けを見たのはどれくらいぶりだろう？

幼稚園の頃田舎のおばあちゃんの家に行ったときに、五つ年の離れた兄と二人で見た夕焼けがこんな風に真っ赤だった。それ以来かな？

「夕焼けこやけの赤とんぼ」

そう言えば、あの時もこの歌を口ずさんでたなあ。

他にもいくつか童謡を教わったっけ。

昔の事を思い出して、その時教わった童謡を歌う。

気がつくと日はだいぶ沈んで、山の上のほんの少しを残して空は紺色になっていた。

（ありゃ、もうこんな時間か）

そう思って起き上るとほぼ同時に部屋の外から声をかけられる。

「咲夜様」

「へっ！？あぁっ！はい！」

「幸村様がお呼びですよ」

「えっ？幸村：ッ様、が？分かりました！すぐ行きますっ！」

いきなり声掛けられたから変な声を出してしまった・・・。

それに、危ない危ない。幸村の事をいつも通りに呼び捨てにしそうになってた。気を付けないと。

どれだけこっちが知ってても初対面だし。偉いひとだし。うん。

呼びに来てくれた女中さんの後について幸村の部屋に入ったら美味しそうな料理がたくさん並んでいた。

なんでも、“聞きたいことがたくさんあるから夕ご飯でも食べながら。”と言う事だそうで。

薄味なのにとても美味しい料理に感動しつつ、幸村と佐助（おもに幸村）に質問攻めにされた後、何とか自力で部屋に戻ったら、すでに布団と着替えが用意してあった。

（旅館みたいだ。・・・なんか、居候なのに申し訳ないなあ。明日からは色々お手伝いしよう。）

そう思いつつ手早く着替えて（笛の師匠に和服の着方は叩き込まれた）布団に入ると、一日の疲れがドツと出てあつという間に意識は闇に溶け始めてしまった。

眠気ではつきりしない意識の中にふと、思い浮かんだのは、心配をかけているであろう家族の顔と。

幼い頃兄と二人で見た、真っ赤な夕焼け空…。

第六話 夕焼け（後書き）

アンケートに協力お願いします。
詳しい説明は第三話にて。

← ← 選択肢 ← ←

1、真田 幸村

2、伊達 政宗

3、猿飛 佐助

4、片倉 小十郎

5、長曾我部 元親

6、毛利 元就

7、前田 慶次

8、竹中 半兵衛

9、風魔 小太郎

10、誰ともくつつけず転生↓学園物

へ！

11、その他

ご協力お願いします> (| |) <

票が集まらない場合は私の好みで決めたいと思います。

（「書きやすさ」とか「動かしやすさ」とかで。）

第七話 夢

気がつくと、咲夜は闇の中に立っていた。

闇の中のはずなのに、自分の姿や周りの様子がなんとなくわかる。

（ああ、これ夢か。こんなはっきりした夢見るの久しぶり・・・）

そう思いつつ咲夜があたりを見回すとポツリ、と一点だけ光が灯っている場所があった。

その場所に意識を向けると、一瞬でその光は大きくなり咲夜を包み込む。

（わっ！？）

とっさにつぶってしまった眼をそろそろと開くと、あたりは先ほどとは打って変わって、ほの白い空間になっていた。

そして、咲夜以外に何もなかったこの空間に背を向けた人影が二つ。

一人は癖っ毛の金髪。もう一人は少し長めの銀髪。

どちらも長身だが、金髪の男のほうが少しだけ、背が高い。

何かを話しているようだが、思ったよりも距離が遠いのか声は聞こえなかった。けれど、たまにちらりと見える横顔は二人とも楽しそうに笑っている・・・ように見える。

やはり思ったより距離があるらしく、良く見えない。

しかし、そんな二人を眺めていて、咲夜はふと引っかかりのような物をおぼえた。

（あれ・・・なんか、銀髪のほうの人どっかで見たことあるような・・・）

そう思い、首をかしげるのとほぼ同時にドクン、と心臓が跳ね上がった。

一瞬、世界が暗転する。

（なに…！？）

またすぐに世界は明るくなり、元の風景が戻ってきた。けれど、明らかに違うことが一つ。

咲夜から離れたところにいた二人の男。その二人の様子が、おかしい。

銀髪の男が地面にあおむけに倒れていた。金髪のほうは、その隣に膝をつき、必死に何か声をかけている。

よく見ると、二人ともあちこちに傷がある。そして、銀髪の男の胸には紅いものが広がっていた。

（あれ…まさか、血…？）

よく見ようと目を凝らしたところで倒れている男が金髪の腕を掴んで体を起こした。

じわり、と胸の紅が^{あか}広がる。

銀髪の男が身を起こしたことで咲夜にもその顔を見ることができた。先ほどから、どこかで見たことがある気がしている銀髪の男。いったいどこで見たのだろう？

けれど、その答えに気がついた咲夜はがく然とした。

（ッ！うそっ…！？）

銀髪の男は、髪や瞳の色は違えど、咲夜の身近の、良く知る人物にそっくりだった。それこそ瓜二つと言えるほどに。

（どうして！？）

思わず二人のほうへ足を踏み出そうとした瞬間に、またもや世界が暗転した。

一番最初と同じ闇に、包まれる。

不意に、声が聞こえた。

月読つぐよみの力を継ぎし者、月神つきがみの神子みこ

（！…誰！？なに！？）

こちらの世界に来たことで、お前の力が目覚める。力は、器たるお前の望む形に

（…何のこと？力？神子って…？）

分からなくてもいい。今は、まだ。…月読の力は強い。しかし、その強さは人の身に余る。過ぎた力を望むな

低めの、落ち着いた声。しかし、その声が告げる言葉は要領を得ない。けれど、とても重要なことを言われている気がして咲夜はたじろいだ。

月読の力はお前の望む力になり、お前を支える。だが、過ぎた力は破滅を招く

（破滅！？力って何？）

気をつけるよ…。月神の神子、咲夜…

（！待って！）

急に声が遠ざかる。咲夜はとっさに声を上げたが、もう声は聞こえてこなかった。

呆然としている咲夜の耳にかすかな歌声が届いた。少し音の外れた、無邪気な声。

『ゆうつやけこやけえのゝあかとんぼ』

（あ…あれ…昔の私とお兄ちゃんだ…。）

『ねえおにちゃんみて！むこうのおそらがまっかだよ！』

幼いころの咲夜が空を指差す。その先には、傾いた夕日に紅く染め上げられた空。

きっとこれは、田舎の祖母の家に行った時の記憶。幼いころの記憶が曖昧になっていく中でも、これだけは、はっきりと覚えていた。

『ああ本当だ。よかつたな、咲夜』

『うん！すごいきれい！こんなにきれいなみたのは、はじめてだよ！』

そう言つて、はしゃいでいる咲夜の手を兄は引いてくれていた。だがしかし、幼い咲夜は気がつかなかった。

『……ごめんな。』

夕焼けを見つめる兄の表情が悲しげだったことに。そしてその瞳には子供には似つかわしくない憂いや、後悔の色が見え隠れしていたことに。

そしてなによりも、そんな兄の微かに声^{かす}が震えた呟きに……。けれど、気付いたとしてもおそらく分からなかっただろう。

兄のその表情の理由や、言葉の意味は……。

第七話 夢（後書き）

この話は後々重要（になる予定）な伏線です。

私の思っている通りに話が進んでくれれば……いや！進めて見せま
すよ（・―・）

…まあ、銀髪の男が誰に似てるのかは分かる人は分かっちゃったと
思いますけど。

次回からはまた元に戻ります。

ああ！それと、引き続きアンケートに協力お願いします>（――）
<

これからも読んでやってください。ありがとうございました。

第八話 笛の音

皆さんどうも。

私がこの世界に来てから、つまりは上田城でお世話になり出してから、三日が経ちました。

その間、元の世界へ帰る手掛かりはと言うと・・・・・・・・・・ゼロです！

いつそ清々しいですねえ。

ここ二日ほど、手がかりも見つからず、やることも大してないの
で許可をもらって上田城の中をフラフラと散歩したりしてます。

お陰で顔見知りの人が増えましたよ！まあ、ほとんどの人に男だと思われているみたいですが・・・。

今は仲良くなつた女中さんに頼まれて、鍛錬をしているはずの幸村の所へおやつを運んでいる最中。

教えてもらった通りに廊下を進むと、幸村が庭で槍を振っていました。

「幸村様ー。おやつだそうですよー」

幸村に対して様付けするのもだいぶ慣れてきました。

振り返った幸村が、一瞬驚いたような顔をしてこちらに歩いてきます。

「咲夜殿！なぜ咲夜殿が茶を？」

「通りがかりに頼まれたんです。幸村様も私にできる事があれば何でも言ってください！お世話になっているだけなのは心苦しくて……」

「そのようなこと、気にせずとも良いでござる」

「そう言われても気になりますよ」

隣に座った幸村にお茶を渡しながら苦笑する。

本当は戦に参加したり、幸村の鍛錬の相手になれたりすれば一番良いんだろうけど……。

私にそんな力量や根性はない！あ、あと体力も。

それ以前に私はきつと、人を自分の手で傷つける覚悟とかできないし……ね。

そう考えると、幸村達はすごいなあ。

「私にはこんな事しか出来ないですけど、少しでも役に立ちたいんです！……なんか、結構長くお世話になることにもなりそうなので……」
「そうでござるか……」

ほんとと、何時になつたら帰れるんでしょうねえ私は。

でも、実はもうチョイこの世界にいるのも良いかなあ……とか思ったりして。楽しいしね。政宗とかいろんな人にも会ってみたいしね。そんな事を思っていたら、何かを考えていたらしい幸村が顔をあげた。

「実は咲夜殿。某から、二つほど頼みがあるのでござるが……」

幸村から頼み？しかも二つも……なんだろう？

「……咲夜殿は今おいくつなのでござるか？」

「？私ですか？今、１７です」

おお？なんか急に話が変わったぞ？

「そうでござるか！ならば某と同じ年なのでござるな」
「そう言えばそうですね」

まあ、幸村は数え年だろうし私の方が年上かもしれないけど。つて、それより話がズレてるズレてる。軌道修正しないと。

「それで、頼みって何ですか？」

「うむ。同い年ならば、某に敬語を使うのをやめて下さらんか？呼び方も幸村で構いませぬ」

ああ、なるほど。このために急に話を変えたのか。でも…それは駄目でしょ。うん。

「ダメですよ！」

「何故でござるか？」

「何故つて…私は行き倒れかけてた所を助けてもらってお世話になっている上に、身元も知らない人間ですよ！？」

自分で言うのもどうかと思う……ってツツコミはもう無しでお願いします。

「咲夜殿が某たちに危害を加える気が無いのは知っているのでござる」

「それは…そうですね…」

「それに、某には歳の近い友がおらぬのでござる。某は咲夜殿と友人になりたいのでござるが…」

うつ……。そう言われると……。！そんな捨てられた犬みたいな目でこつち見ないで……。っ！

心無しか長い後ろ髪もヘナっとしてる気がする……。シツポ？

「ああもうつ！分かりました！分かりましたよっ！そのかわり、そつちも私の事敬称とかつけて呼ぶのやめて下さい！」

「分かったでござる、咲夜。…これで良いのdarou?」

こんな時は交換条件!と思ったら、あっさり承諾されてしまった。
ま、いいか。

「うん。もういいや。それでもう一つの頼みって…」

もう一つの頼みのほうを聞こうとしたところで、ざあっと風が吹いた。

続いて誰もいなかったはずの目の前にシュタツ、と影が現れる。

「わ!?!」

「おお佐助! 帰ったか!」

「はあゝ疲れた疲れた。ほい旦那、大将からの手紙だよ」

「おお!」

・・・びつくりしたあ。さすが忍びだなあ。佐助はあんまり忍んでない感じがするけど。

「佐助さん、お帰りなさい」

「ただいま、咲夜ちゃん。あと、俺様の事も呼び捨てで構わないよ?」

「え? 話聞いてたんですか? それに…」

「良いのいいの。それに、旦那は呼び捨てなのに俺様に敬語使ったら、旦那の顔丸つぶれだよ?」

あ、確かにそうかも。立場的には佐助は幸村の部下だもんね。

「じゃ、そうさせてもらうね。佐助」

「はいよ」

そんな会話をしていたら、手紙を読み終わったらしい幸村が声をかけてきた。

「咲夜。咲夜はお館様の事をご存じでござるか？」

「知ってるよ。武田信玄公のことだよな？」

と言うか、呼び方が変わっただけで口調は変わらないんだね。

「ならば、良かったでござる。近々、お館様の所へ行く事になるやもしれぬ」

「え？」

「大將が旦那からの手紙を読んでね。咲夜ちゃんに会ってみたいって言い出したんだよ」

「2、3日中には行く気にいるが、心の準備をしておいてください」

「うん。了解。ねえ幸村、それで…」

「？」

本物のお館様がどんな人なのかも気になるけど…。

それより今は幸村の二つ目の頼みのほうが気になる！佐助の登場で結局まだ聞いてないし。

「二つ目の頼みって何？」

「おお！そうでござった！咲夜は笛が得意なのだろう？」

「そうだけど…？」

こっちの世界に来た日の夕餉の時にそんなこと話したな。そういえば。

「ぜひ、笛を聞かせてはもらえぬか？」

「え？…構いませんけど…」

別に、笛を聞かせるのは良い。でも私、笛持ってきてないんですけど。

「笛ならば、これを使つてくだされ」

「いいけど、そんなに上手なわけじゃ…得意つてだけで」

「それでも構わないでござる」

「俺様も咲夜ちゃんの笛聴いてみたいね」

「…じゃあ、一曲だけ」

ここまで言われたら吹かない訳にいかないでしょう！

その後、咲夜が紡ぎだす笛の音が上田城の中に響いて行つた。

その笛の音のあまりの美しさに立ち止まり、聴き惚れるものが多数いたのだが…

咲夜自身はそれに気が付いていなかったりする。

第八話 笛の音（後書き）

すいません。だいぶ長くなりました∴orz
物書きは短くまとめられてこそ一人前らしいですが・・・。
私はまだまだですね（；|；

読んでいただきありがとうございます。

第九話 試練と宴と殴り愛（前書き）

お知らせ

実施中のアンケートについてですが、これからの話の都合上などの理由で選択肢をいくつか削らせていただきました。申し訳ありません。

アンケート途中経過

今のところ

・真田 幸村 1

・片倉 小十郎 1

・転生 ↓ 学園物 1

といった感じになっています。是非、アンケートにご協力をお願いします。

第九話 試練と宴と殴り愛

ああ、緊張するっ……。誰か私に正しい礼儀作法を教えてください！

突然何言い出すのかって？そのまんまの意味ですよ！

私は今、前回の幸村の予告通り信玄公のお屋敷にいるんですから・・。

ここに来るために乗せられてた猛スピードの馬（もちろん幸村と二人乗り）のせいで、寿命がただでさえ縮まつたて言うのにその直後にコレって・・。

幸村は私を殺す気でしょうか？

それにしても緊張する・・。

そんな風にグルグルと考えていたら、襖の向こうから聞き覚えのあるお館様の声が・・。

「咲夜とやら。入れ」

「はっはいっ！失礼します！」

静かに襖をあけて部屋に入ると、信玄公の前でなるべく綺麗に三つ指をつく。

時代劇とかだとこんな感じだから・・。たぶんこれで良いハズ？

「面をあげよ。そう硬くならずとも良い。…やはり、儼然とそう変わらぬのう」

「え？」

「すまんすまん。幸村たちから、お主は異なる世界の者だと聞いていたのではな」

「はあ……」

そりゃそうだけでもさ。同じ？人間です！…むしろお館様達のほうが人間離れしてるでしょ。絶対。と、まあそれは置いて。

「でも、信じていただけるんですか？こんな突拍子もない話…」

「幸村達から信じるだけの根拠は聞いておる。ただ、僕は幸村達ほど甘くはないぞ」

つまりはおかしな真似をしたら・・・ってことね。肝に銘じておきます。ハイ。

「それと、今夜は宴を開く。お主も参加するようにな」

「分かりました」

「屋敷の中は好きに動いてくれて構わんぞ。遠慮せずゆっくりしていくと良い」

「ありがとうございます！」

笑いながらそう言うてくれた信玄公にお礼を言う。

なんかお館様って“親戚のおじさん”って感じがするんだよねあ。なんでだろ？

「もう下がっても良いぞ、咲夜。何か必要な物があれば遠慮せずに申せ」

「はい、失礼します」

よかったあ、これ以上2人で喋ったりしてたら・・・。

緊張して何しか分かかったもんじゃない！

廊下に出て庭まで行くと、大きく一つ深呼吸をした。

（よしっ！これで第一試練突破！）

え？何の試練かって？それは聞かない約束でしょ。

「くうーっ」

一度軽く伸びをして用意してもらった部屋に戻ろうとした瞬間。
後ろからドカーン、とものすごい音が聞こえてきた。

「なっ…なに!？」

「しっかりせぬか幸村ーっ!！」

「申し訳ありませんお館様ーっ!！」

「!？」

あれはもしや・・・いや、もしかしくなくても・・・武田名物、殴り
愛！

うわ、生で見れるなんて思わなかった。でも、実際に見ると迫力が
すごい！しかも結構痛そう！

「ゆーきーむーらーっ!！」

「おーやーかーたーさーばーっ!！」

と言うかこれ、周りにも結構被害がっ……。石とか木片とか土と
かなんか色々飛んでくる！怖い！どうしよう、ヘタに動いたら絶対
ケガする！

何となく嫌な予感がして顔をあげたら、結構大きめの石がこっちに
飛んでくるのが見える。

「ええ!？ちよっ…待っ…!」

「よっ…と」

咄嗟のことで動けなくなっていたらすぐ近くで聞きなれた声が聞こ

えた。

それに、気がつくときよりだいぶ目線が高くなっている。ここは・・・屋根の上？

「全く何やってんの咲夜ちゃん。あの状態の旦那たちに近づいたら危ないっしょ」

「佐助っ！？びっくりした」

どうやら佐助が助けてくれたみたい。に、しても人間一人抱えて屋根の上跳び上がれるとか・・・さすが忍者。

「ねえ、どうして急に殴り愛が始まっちゃったの？」

「え？あー…大したことじゃないから気にしなくて良いよ」

「？分かった」

なんか、佐助の言葉が歯切れの悪い感じがしたけど・・・まあいいか。

その後、殴り愛を眺めてたり佐助を手伝って破れた障子を貼り直したりしたらあっという間に日が暮れてしまった。

もう少ししたら、宴が始まるみたい。どんな感じなのかすごい楽しみだな♪

続く

第九話 試練と宴と殴り愛（後書き）

後書き

すいません。お館様の口調が分かりません。

何これ、いざ書いてみるとすごい難しいッ！・・・精進します。

この話は長くなりそうなので九話と十話で前後編にしました。
十話もなるべく早く更新したいと思いますので・・・。

それと、もう一つお詫びを。

しばらく、更新と更新の間が空いてしまうかもしれません。

何を隠そう私、桜耀は受験生なんです。

そろそろエンジンを掛けないといけないので・・・。

えっ！？エンジンかけるのが遅すぎるって？（。D。〇）アーアー

キコエナ―イ

第十話 試練と宴と殴り愛 後編

日も暮れた甲斐の国、信玄公のお屋敷の一角は・・・
どんちゃん騒ぎでした！！

お館様が宴を開いて、兵の皆さんもお館様も幸村も、テンションが
上がってるみたいです。

すごく楽しい！楽しいけど周りが酒臭い！

私はお酒飲めないしね。未成年だから。

え？戦国時代だから関係ない？『同い年の幸村も飲んでるだろ』っ
て？

でも私、この世界こゝの人間じゃないからさあ。呑まない方が良よいかな
ゝって！

だから、隣に座ってるお館様に勧められても呑んでないですよ！

「咲夜よ」

「？はい」

「お主は笛が得意だと聞いているが真か？」

・・・お館様、突然ですね。そう見えないけど、実はお館様も酔
ってます？

と言うか、特技の事なんかいったいどこから・・・あ、幸村と佐助
か。

「真ならば、今聞かせてはくれんか？」

「え！？いや、お館様に聞かせるほど上手くは...」

「そのような事はありません！咲夜の笛は素晴らしいものでござる
！」

お館様に聞かせられるほど私の笛は上手くない！

自慢できるといってもプロの音には敵わないって！信玄公ならもつと上手いひとの笛聞きなれてるでしょうに！

そう思つて断ろうとしたのに、その台詞を幸村が途中でさえぎってきましたよ！？しかも今は全く必要としないフォローを・・・
っ！

「確かに。日本の本で一、二を争うかもね。咲夜ちゃんの笛」

「！？そんなことはっ…。それに、私笛を持ってないですしっ！」

佐助までなに言っちゃてくれてんの！？

でも、『笛が無い』。これが一番の問題だね。この間も幸村から借りた訳だし。

良い言い訳があつた♪と思つて安心していたら、世の中思惑通りに事は運ばぬようで・・・。

「そうか。ならば丁度良い。咲夜」

「…？なんですか、コレ？」

お館様に渡されたのは袱紗ふくさって言うの？

ちよつと高級そうな感じの質のいい布に包まれた、細長い筒状の物。

「あけてみよ」

「あ、はい」

布を丁寧に取つて驚いた。

布の中から出てきたのは、とても美しい細工が施されている横笛でした。

「うわ…綺麗………」

その笛は黒地に水の波紋を思わせるような青い線が所々に入っていて、メインの柄は桜の彫り物。

少し持っただけでもとてもいい笛だというのが良く分かる。

「その笛を使つて一曲、聞かせてくれんかの？」

「え？良いんですか！？」

こんな良い笛を手にして、しかも使つていいと言われれば・・・っ。吹かない訳がないでしょう！まあ、一種の職業病です。私の場合“職業”じゃないけど。

試しに軽く音をだして見て、一拍置いてから曲を演奏し出す。

（すごい…音もかなりきれい…）

予想以上の綺麗な音に、あっという間に一曲終了。

恐る恐る目を開けてみると・・・あれ？なんか辺りが静まりかえってる？

（・・・もしかして、何か失敗した？笛を吹いてると集中しすぎて周り見えなくなることあるし、あり得ない事じゃないよ？）

なんて、パニックになりかけてたら急にわつともものすごい拍手をされ、さらに状況についていけなく・・・。

「素晴らしい音色だった。お主は天賦の才の持ち主じゃな」

「そつ、そんなこと！私ではなくてこの笛がすごいんです！」

「謙遜せずともよい。しかし…のう咲夜よ」

「？」

「お主、このまま武田に残って幸村の嫁にならんか？」

・・・！？ちよつと待つて！？私が嫁！？しかも幸村の！？つてそれ以前になんてお館様私が女だつて分かつてるの？言つてないはずなんだけど・・・

頭の中で言いたいことが一気に出てきたせいで逆に何も言えないでいたら、ほんの一瞬だけフリーズしてた幸村がすごい勢いでお館様に食つてかかり始めた。

「何をおつしやられるのですお館様！」

「咲夜は器量も性格も良い上にこれだけの才も持つておる。できた嫁になるぞ？」

「ぐっ…しかし咲夜はっ」

「…まさか幸村よ。咲夜のことを男だと思っているのではあるまいな」

これ、間違いなく女つてことバラされるルートだよな。

ふと佐助のほうを見たら額の所に手を当ててまさに『あちゃー』つて感じになってるし。

「咲夜は女子だ。のう？」

「…はい。えつと、黙つててごめんね？」

「なっ……」

ああ、昔もよく男と間違えてた人に女だつて言うところこういう反応されたなあ・・・。（↑現実逃避

「全く…友の性別すら見抜けぬなどたるんでおるぞ幸村っ！」

「もっ…申し訳ありませんお館様——！！」

あつ・・・殴り愛が始まつちゃった。言い訳する暇なし。

・・・はあ、明日から幸村の態度がどうなるか・・・。

すごい不安だなあ・・・。

第十話 試練と宴と殴り愛 後編（後書き）

何とか第十話更新しました。

二、三話後には伊達主従が出てくる予定なのですが…

いかんせん本来ならばPCなどをやっていられない筈の立場なので…

とっ…とりあえず温かく見守ってください！！

読んでいただきありがとうございます。

十・五話 咲夜と宴と笛の音と

信玄の開いた宴の席。

幸村や信玄に押し切られ、咲夜は笛を演奏することになった。

信玄から渡された笛を試すように何度か音を出してから、咲夜が笛の音を奏で始める。

「これは……」

信玄がそう呟いたきり黙りこむ。

騒がしかった周囲も水の波紋が広がるようにして、咲夜を中心に静まっていた。

ざわめきのような声も聞こえなくなり、静かな部屋の中には咲夜の奏でる笛の音だけが流れて行く。

けれど、部屋の中が静かなのは笛の音のためだけではなかった。もう一つの原因は笛を奏でる咲夜の姿。

月の光を浴びて笛を奏でる咲夜の姿はとても美しいものだった。神々しい、という表現がふさわしいような儚いまでの美しさ。

その場の全ての人間が魅入られるほどの。

曲が終わり、いち早くその状態から抜け出したのはやはり信玄だった。

そしてこの後信玄の爆弾発言により、騒がしさが復活することになる。

「お主、このまま武田に残って幸村の嫁にならんか？」

「……っ！？」

「なっ……」

そこからさらに一悶着あり、結局は幸村に咲夜が女だという事が

バレてしまった。

佐助は思わず額に手を当ててしまう。

（あっちゃー。大将ばらしちゃったよ…）

溜め息をつき、幸村のほうへ視線を向けると幸村は完全に硬直してしまっていた。

ちなみに顔は真っ赤。

（まあ、一緒に馬に乗ったりしてたしね）

咲夜が女だと知っていたら、幸村が絶対にやれない事だ。

「友の性別すら見抜けぬなど、たるんでおるぞ幸村ーっ！」

「もっ…申し訳ありませぬお館様アー…！」

（あーあ、始まっちゃったよ）

始まってしまった殴り合いはひとまず放っておき、佐助が周りを見回すと咲夜が呆然としている姿が目に入る。

（明日から大変だよ…コレ…）

幸村が咲夜の事を避けるようになるのは目に見えている。

けれどこれをきっかけに、幸村の女性に対する苦手意識も克服できるかもしれない。

（って、そう上手くいけばいいけど…）

佐助は都合のいい方向に行きかけていた考えを即座に引き戻した。確かに信玄は割と計算高いが、今回は素でバラしていた気がする。

(…まあ、何とかなるか)

咲夜もずっと武田にいる訳ではない。

彼女は異なる世界の人間なのだから。

自分自身に言い聞かせるようにそう考え、佐助は立ちあがった。

「はあ、つたく。そろそろと止めますか」と

(俺様、減給されるのは御免だし?)

これ以上被害が広まれば、関係のない佐助の給料からも天引きされる事間違いなしだ。

「はあ…まったく…」

もう一度大きいため息をつき、佐助は今だ殴り合いを続ける二人の元へと向かうのだった。

十・五話 咲夜と宴と笛の音と（後書き）

十・五話更新しました！

前期試験が終わり、多少余裕ができたので・・・。
結果にもよりますが、できる限りまたコツコツ更新していきたい
と思います。

ありがとうございました。

第十一話 武田の笛師

皆さんども。咲夜です。

幸村達は軍議があるとかで、一人ヒマな私はお館様の屋敷の中をフラフラしています。

そういえば朝方幸村とちょっと話したんですけど・・・幸村、明らかに挙動不審でした。

呼び方が『咲夜』から『咲夜殿』に戻ってしまったところか、目線すら合わせてくれません。

・・・シヨックだなあ。

まあ、私は態度を変える気はありません。

そんな風にフラフラと歩いていたら何か話し声が聞こえてきました。

それにこの声・・・お館様と幸村？

「幸村よ。次の戦も近い、気を抜くでないぞ」

「承知しております。お館様」

・・・戦！？あ、でも・・・戦国時代だから当たり前なのか。

戦かあ。どこだろう？

でも、女だってばれちゃったからにはついて行ったりできないだろうな・・・。

いや、戦場に行きたい訳じゃないんですよ。ただ・・・ちょっと。うん。

「今度も川中島に陣を？」

「うむ。しかし……！」

・・・ん？どうしたんだろ？急に静かに・・・

「咲夜ちゃん？そこで何してんの？」

「っ！！？さっ…佐助！？びっくりした…」

だつて急に後ろから声かけられたんだよ！！誰もいなかったはずなのに！

・・・さすが忍。佐助は全然忍んでない気もするけど。

「ねえ咲夜ちゃん。俺様、盗み聞きはあんまり褒められた事じゃないと思うけど？」

「え？あつ…」

確かに・・・言われてみれば、今私がしてる事って盗み聞きだ・・・。もしこれが重要な軍事機密だったりしたら・・・。

「あの…ごめん、なさい」

「だって、大将、旦那」

佐助が声をかけた方を向くと、いつの間にか襖があいていてお館様と幸村がこつちを見ていた。

もう一度謝るとお館様はニカツと笑って部屋の中に招き入れてくれた。

「で、咲夜よ。今の話を聞いていてどこまでわかった？」

「へ？あ、えつと…戦が近いうちにあるって所まで、です。けど…」

「けど？」

少しためらったけど、佐助に促されて話を続ける。この予想、あつてははずだけど・・・。

「次の戦は上杉謙信公とですか？」
「うむ」

あ、やっぱり。お館様に川中島とくればやっぱり謙信公との戦だね。

・・・ちよつとお願いしてみようかな。

「あの…」

「？」

「私も連れて行ってもらえませんか？」

「「は？」」

今までほとんど会話に参加してこなかった幸村と佐助にもの凄い胡乱な顔をされた。

「連れてって…で、戦に！？」

「うん」

「ダメでござる！女子を戦に連れてゆくなどつおなじ

「連れて行っても良いぞ」

……！？お館様！

「？」

「本当ですか！」

「うむ。ただしいくつか条件がある」

・・・条件？

「あの…どんな条件ですか？」

「一つは、絶対に本陣からでないこと。もう一つはできる限りの範囲で良いから周りを手伝う事」

あ、よかったあ。それくらいなら全然大丈夫・・・だと思っ。たぶ

ん。

「最後の一つは、条件と言うより提案だが…」

「はい」

「お主、笛師として武田に使えぬか？」

「えっ？ 笛師…ですか？」

「いつまで滞在していれば良いのか分からぬならば、何か仕事があった方が良いでしょう？」

確かに……。ただ居候してるのは心苦しかったし、特技（趣味？）を仕事にできるって最高かも。

うん。その話、乗った！

そんなこんなで武田の笛師となり、川中島の戦にも連れて行ってもらえる事になった咲夜。

しかし、この先に驚きの展開が待っている事を咲夜たちが知る由もない。

第十一話 武田の笛師（後書き）

・・・やっぱりお館様が難しい。口調が良く分かりません。
アドバイス等あったら是非是非教えてください。

もうじき“あの”蒼い主従が出てきます。たぶん。
実は今、伊達成実（しげさね）捏造になります）と鬼庭綱元（おににわつなもと）（こちらも捏造）
の二人を出そうか出すまいか迷っています・・・。

こちら、ご意見あれば是非教えてください・・・。

本文、後書き共に長々とすみません・・・

うづございました

ありがと

第十二話 川中島と独眼竜（前書き）

＊お知らせ＊

三話からやっているアンケートの募集期間を延長したいと思います。
是非是非協力してやってください。
詳しい事は後書きに。

第十二話 川中島と独眼竜

皆さんどうも。咲夜です。

今私がいるのは川中島の合戦場。もっと詳しく言うならその中にある武田軍の本陣です。

戦闘は武田の本陣から遠い所でやってるみたいで、微かに声が聞こえてくる程度。

けが人も何人か本陣へ運ばれてきたけど、重症の人はいなくてホッとしています。

でも、それで私のやれることは全くないので暇です。

・・・無理言って連れてきてもらってこんなこと言ってるのはワガママですね。

大人しく、笛でも吹いていますか。お館様に許可はもらってるし。結局、あの笛もらっちゃったし。

うん。そうしよう！

ところ変わって川中島の合戦場から少し離れたところ。

そこに居たのは武田軍とも上杉軍とも違う集団。

その集団の先頭に立ち、合戦場を眺めているのは三日月のまえたてのついた兜をかぶり右目に眼帯をした青年。

「HAッ！派手にpatryしてんじゃねえか」

そういつて、眼帯の青年——政宗はニヤリと笑う。

・・・~~~~・・・

「ん？」

一瞬、政宗が怪訝な顔をする。政宗の耳に届いたのは微かな、しかしはっきりとした笛の音色。

本来ならば、戦場では決して聞こえるはずのない音だ。

「小十郎」

「はっ」

「これは？」

「おそらく…武田の本陣から聞こえてくるのではないかと」

主語の省かれた政宗の問い。その問いを正確に読み取った小十郎の答えに、しかし政宗は表情をさらに胡乱なものへと変える。

「武田の…？」

そして、何かを考え込むようにしていた政宗が、顔を上げた。

「小十郎。予定変更だ」

そういった政宗は笑っていた。それはそれは、楽しそうに。

「武田の本陣へ行く」

「政宗様、それは…」

「no problem 今なら本陣は手薄なはずだ」
「……………」

政宗の言つとおりだとしても、敵の本陣へ乗り込んで行くのだ。危険なことに変わりはない。

しかし、この表情では政宗もきつと譲らないだろう。
それならば…

「承知しました」

自分が、彼の背中を守ればいい。

「任せたぜ」

「お任せを」

短く会話を交わし、政宗は馬に飛び乗る。

（戦場で酔狂な事をしている奴の顔を見に行ってやろっじゃねえか）
「行くぜ小十郎！Let's p a t r y！」

その頃、武田の本陣では・・・。

「…つくしゅん！……？誰か…噂してる？」

不穏？な空気を咲夜が感じ取っていたとかいないとか……。

第十二話 川中島と独眼竜（後書き）

はい！本編に伊達主従が出てきました。やっと…やっとだ…っ！
で、前書きにも書いてあった通り、アンケートの期間を延長します。
三話から取っていたアンケートの締め切りが『本編で伊達主従が出てくるまで』

だったんですけど…票がほとんど集まっていないので。

もう一度、選択肢を載せておきます。

1、真田 幸村 2、伊達 政宗

3、猿飛 佐助 4、片倉 小十郎

5、長曾我部 元親 6、毛利 元就

7、前田 慶次 8、誰ともくっつけず転生↓学園物へ！

9、その他

こ

んな感じ。

アンケート、是非協力してやってください。協力していただけると
喜びます。私が。

では、次の話もよろしく願いいたします。

ありがとう

ございました。

第十三話 双竜との出会い

私は今、川中島の合戦場、武田軍の本陣で笛を吹いています。もちろん音量はかなり抑えて。

そのおかげで気がついたんですけど、なんか外が騒がしいです。

「何かあったのかなあ？」

ちょっと外の様子を見に行こうと思って立ち上がった瞬間。

私の耳に届いてきたのは・・・

「独眼竜は伊達じゃねえぜ！？ you see!？」

英語交じりの言葉。しかも中井■哉さん voice。

「...聞き間違いかなっ、うん！」

そつだよ。聞き間違いだ。きつと。

だって“アノ人”が川中島にいるはず無い・・・事もないかも。

そういえばゲームにあったなあ。川中島乱入戦・・・だっけ。

でも・・・本陣にいれば大丈夫かな。政宗ならお館様や幸村達の所に行くだろうし。

会ってみたい気もするけど・・・下手に動くと戦の邪魔になりそうだし。うん。

「咲夜様！」

「?...どうしたんですか？」

自分の中で結論を出したちょうどそのときに、本陣へ飛び込んでき

たのは赤い甲冑を着た武田の兵士さん。
なんか、すごい嫌な予感がします。

ついでに言うならさっき聞こえた声に関係がある気がします。

「今すぐに逃げてください！敵襲です！伊達軍がこちらへ…っ！」

やっぱり！！いや、でも逃げると言われてもどこへ！？

外は戦場だし、私なんかじゃすぐに…！！

「こちらへ向かっているのは二人だけです！俺達で引きつけておきますから、その隙に咲夜様は幸村様たちの所へ！」

「えっ！？ちよっ…まっ」

返事をするよりも先に兵士さんは再び外へ飛び出して行ってしまう。
ちよっと待って…っ！一人で幸村達の所へ行けと？

絶対ムリ！

「うわっ…どうしよう逃げなきゃ。でもどこに？…あっそうだ！逃げるのが無理ならせめてどっかに隠れて…」

本陣の中でオロオロとしていてふと思いつく。

そういえば、さっきの兵士さん。こっちへ向かっているのは『二人』
って言うってた？

（…まさかとは思っけど…。でも伊達軍で二人と言われる
と、どうしてもあの二人が真っ先に思い浮かぶし…。）

そんな現実逃避に近いことをグルグルと考えていた私を引き戻した
のは、かなり近い所から聞こえた馬の嘶いなき。

そして、明らかにこちらへ向かってくる二つの足音。

今からじゃ、どこかへ隠れる余裕もない。

そして、足音の主が姿を見せた。

第十三話 双竜との出会い ―（後書き）

長くなりそうだったので、またしても前後編に。

・・・後編もなるべく早く投稿します。

声優さんの名前って出しても良いものなのでしょうか？いまいちわからなくて…

あまり良くないようでしたら、ご指摘お願いします。 > ((<

ありがとうございます。次の話もよろしくお願いします。

第十四話

双竜との出会い

二（前書き）

今回の震災で犠牲になった方のご冥福を心よりお祈りいたします。

2011/3/20

桜耀

第十四話

双竜との出会い 二

足音の主が、姿を見せた。

「~~~~」一人で本陣に残るとは、いい度胸じゃねえか」

「……………」

（！やっぱり…）

軽い口笛と共にそんなことを言ったのは、私の予想通り……。

独眼竜。そして、その右目と呼ばれている二人。

すつ、と政宗が一步、こちらへ近づく。そしてもう一步。

「政宗様」

こじゅさ……小十郎さんの声にも、ひらりと片手をあげて返しただけ。

政宗がこちらへ近づいて来るのに合わせて、私もジリジリと後ろへ下がる。

「あつ……！」

気がつけばもう、本陣の一番端まで来ちやつてる……。

これ以上はもう、下がれない。

下がるのがダメなら横移動だ！そう思って顔をあげたら、すぐ目の前に政宗の顔があつた。

政宗は、しばらく私の顔をまじまじと見てから口を開く。

「さっきまで笛を吹いていたのはお前か？」

「は？っ……はいっ！」

胡乱に聞き返してしまつてからあわてて返事をする。こつちがよく知つていても、向こうは一国の領主。エライひと・・・の、ハズ。

「Hum……」

政宗が何かを考えるような素振りを見せる。顔は相変わらず近いまま。

なんとなく気まずいなあ・・・と、あちこちに視線を泳がせていたら、急に政宗が話しかけてきた。それも英語で。

けれど、その英語は私にも解るような、英語の初歩ともいうべき質問。

「What your name？」

「えっ？あ、えと、咲夜です。望月咲夜」

「！？…お前、南蛮語が分かるのか？」

政宗にそう聞かれて気がついた。

・・・こつて戦国時代だったわけ・・・。

「あ、えつと、少しだけですっ！ほんとにちょっとだけっ…！」

「なるほどな……。OK、気に入った」

「え？なに…」

ワタワタと言い繕っていたら、政宗がニヤリと笑つて呟いた。

うまく聞き取れなくて、聞き返そうとしたら伊達軍の兵士らしい人が本陣のに飛び込んでくる。

「筆頭！！小十郎様！！」

「なにがあつた」

「真田がこつちに戻つてきてます！」

「OK。すぐにそつちへ行く」

政宗の返事を聞いて、伊達の兵士さんが走って戻っていく。
その後を追うようにこじゆさんと政宗が足早に出ていってしまった。
一瞬、政宗がこつちを振り返る。

なんとなく、『ついてこい』って言われてる気がして政宗達を追いかけて外へ出る。

すると、政宗はすでに馬に乗っていた。

「あー…」

「俺の名は政宗だ。伊達政宗。OK？」

「あ… I see .」

とりあえずおそろおそろ声をかけたら名前を名乗られる。
そういえば、まだ名前教えてもらって無かったなあ。

「なあ… 咲夜」

「？」

「Could you go with me? : 奥州に来ねえか？」

「はあ…？」

なんで急にそんな話に…？

いまの会話の流れの中にそんな要素あったわけ？

「What about you? 《どうする?》」

「え? ええ?」

これは、どんな反応をすれば…? ..? ..?
だたオロオロしている私を見て、政宗の手がさらに伸ばされる。
もう少して、その手が私に触れそうになった。その時…

「っ！」

「ひゃあ!？」

私と政宗の間を、何か、鈍く光るものが飛んでいった。

それとほぼ同時に私は強い力で引つ張られ、気がつけばだいぶ政宗から離れた所へ移動している。

「武田^{ウチ}の人間、勝手に引き抜こうとしないでくれる？」

「わ?! 佐助?!」

「... よお。久しぶりだな、真田の忍」

頭の上から聞こえてきたのは、もうすっかり聞きなれた佐助の声。後ろから佐助に抱えられてる様な状態・・・なのかな？

佐助のほうを見上げると、顔をのぞきこまれる。

「咲夜ちゃん、大丈夫？」

「え? ああ、うん。私はなんとも...」

「そっか、良かった。... そろそろ真田の旦那も来るかな？」

佐助のあとを追って視線をめぐらすと、離れた所で物凄い砂煙があがっていた。

しかも、どんどんこっちに近づいて来る?!

「咲夜殿おーっ！」

「... うそおっ! 幸村!？」

よくよく見れば、砂煙を起こしているのは馬に乗った幸村だった。一体どのくらいのスピードが出てるんだろう。あれ。

そんなことを考えている間に、幸村はあっという間に私達のところ

へ辿り着く。

幸村に真っ先に声をかけたのは政宗だった。

「Hey! 久しぶりだな、真田幸村」

「貴殿は…伊達政宗ッ」

「せっかく久しぶりに会ったんだ。派手にpartyといこうぜ!

…と、言いてえところだが、今回はこのまま退かせてもらう」

「なっ…?」

政宗の言葉に幸村は拍子抜けたようになっている。

そして、それは私も同じ。

せっかく目の前で蒼紅対決が見られると思ったのに…。

「じゃあな、真田幸村。咲夜、see you again」

「へ?」

「く…待てっ!」

「行かせねえ」

政宗を追いかけようとした幸村の前にこじゅさんが立ち塞がる。

そのまま刀を振り上げると、こじゅさんは幸村との間に雷を叩き落とした。

目映い光が炸裂して、目の前が真っ白になる。

「眩しっ…!?!」

「くうっ!」

「ッ…!」

なんとか周りが見えるようになった頃には、すでに政宗達はいなかった。

それほど長い時間じゃ無かったはずなんだけど…。

「咲夜殿、大丈夫でござるか!？」

「まだちよつと目がチカチカするけど…大丈夫だよ」

「ねえ咲夜ちゃん。独眼竜の旦那たちは、一体何しにきたの？」

「さあ……?」

そう言われれば・・・政宗たちは何しに來たんだろう?

それよりも、政宗が去り際に言った『see you again』
と言葉……。

ごく普通の挨拶のハズなのに、妙に引つ掛かるのはなんでなのかなあ?

第十四話

双竜との出会い

二（後書き）

長い！そして小十郎の出番がほとんどありませんね…。
でっ、でも！じきに活躍するはずなんです！活躍する…はず…たぶん。

幸村もあまり活躍できてないですね…。
頑張ります…。

ありがとうございました。

第十五話　がーるずとーく??

まつしろじょう
松代城の一角。

武田軍と上杉軍が同盟を組むことになり、お館様と謙信様は話し合
いの真つ最中。幸村もそこに加わっていて、私は佐助についてきて
もらって、お城の中をブラブラしています。

でも、さっきから気になることが一つ……。

「ん……」

「咲夜ちゃん、どうかした？」

「ねえ、佐助。近くに忍びさんとか……いる？」

そう。さっきから何か、視線を感じるんです。

「……どうして？」

「いや……さっきから何か視線を感じて……」

私がそういうと、佐助は一瞬驚いたような顔をしてから小さく苦笑
する。

「咲夜ちゃんって、結構敏感？」

「そんなことないと思うけど……」

相変わらず突き刺さってくる視線の正体を、なんとか突き止めよう
とキョロキョロ辺りを見回す。

そんな私をみていた佐助が、急に天井に向けて声をかけた。

「咲夜ちゃんにも気がつかれてるんだから、いい加減でてきたら？」

「うるさいっ！」

佐助の声に、天井から女性の怒号が帰ってきた。

それとほぼ同時に、私は佐助に引つ張られて一歩後ろに下がる。すると、私の顔すれすれのところを何か音が立てて横切っていた。

そのまま、その「何か」は近くの柱に当たり、「ドスッ」と鈍い音を立てる。

「え？」

おそろおそろ「ドスッ」と音のした方をみると、クナイが柱にしつかりと刺さっていた。

「・・・うわぁ」

なんか、つい最近もこんな場面を見た気がする・・・。

たぶん、佐助が後ろに引つ張ってくれなかったら、あのクナイは私に刺さってたんだろうなぁ。

とか、そんなことを考えて背筋がヒヤリとする。

ギクシャクと無理に首を動かして、クナイの飛んできた方をみると・・・。

そこに立っていたのはきわどい服を着た金髪の女性。

（やつぱり、かすがだよ・・・）

「かすが。咲夜ちゃんに危害を加えるつもりなら、俺様も容赦しないよ？」

「そいつの様な怪しい人間を、謙信様に近づけない事が私の仕事だ！」

「咲夜ちゃんに手を出せばそっちが危なくなることくらい、分かるっしょ？」

佐助とかすがの間にピリピリとした空気が流れ出す。

それはきつと、殺気とかそういうものなんだろう。

平和にのほほんと生きてきた私が、今まで一度も感じたことのない空気。

正直言つて、怖い。

そんな私にかまわず、二人のにらみ合いは続く。

「そんなことは分かっている！私はただ監視を・・・！」

「とか言っちゃって、ホントは咲夜ちゃんにヤキモチやいてるだけつしょ??」

・・・ん？

なんか、佐助の口調が急におちゃらけたものに・・・？

「なっ…！」

「昨日、咲夜ちゃんかなり褒められてたしねえ？」

「っ・・・違うッ！！」

「ハイハイ、そういうことにしときましょ」

・・・ああ、かすが図星だったんだ。

なんか、なんだかんだで佐助とかすがって仲良い気がするけど・・・
気のせい？

「・・・・・・！！」

「ん？」

ぎゃあぎゃあと言い合っている二人の（というよりかすがが佐助に
からかわれている）声のほかに、別の声が聞こえた気がした。

二人も気がついたみたいですよ、と周りが静かになる。

「・・・・・・・・えっ！」

「ありゃりゃ、旦那のおよびだ」

「そのようだな」

「え？」

二人とも耳良いなあ。結構遠くの方から聞こえてたのに。

私、なに言ってるかどころか、誰の声かも分かんなかった・・・。

「じゃ、そう言うわけだから咲夜ちゃんのことヨロシクね。かすが」

「なに！？」

「え？ちよっ、待つ・・・！」

あわてて佐助の服を掴んで止めようとしたけど、その手はきれいに空振りしてしまう。

結局、かすがと取り残されてしまった。
気まずい空気が流れる。

「あ、えっと」

「・・・・・・・・ふん」

「あっ待って！」

かすががどこかに行こうとしているのに気づいてとっさに引き留める。

「なんだ」

「えと・・・」

何か、かすがと盛り上がりそうな話題・・・。
かすがと言えば・・・やっぱり謙信様？

「あの、謙信様ってすごく綺麗な方ですね」

「当たり前だッ！謙信様はお美しい上にお優しい！」

「あ、昨日褒めていただいても嬉しかったです。私の笛なんか
たいしたものじゃないのに・・・」

昨日のことを思い出すだけで、少し心苦しくなってしまう。

実際の謙信様はゲームの登場人物としてみるよりも素敵な人だった。
かすがの気持ちも分かる気がする。なんとなく。

「謙信様は、とても尊敬できるお方ですね」

「当たり前だ！・・・お前、なかなか話が分かるじゃないか／＼」

今、かすがについて気がついたことが一つ。

・・・かすがってツンデレ？

その後もしばらく二人でおしゃべりをして、私はかすがと友達にな
れたようです。

第十五話　がーるずとーく??（後書き）

かすが、登場です。

これから咲夜のいいお姉さんの存在になるはずです。

ぜひ、「このキャラを出して!!」と言つて要望があればお聞かせください。

登場の前倒し、出ない筈だったキャラの予定変更、していくつもりです。

ありがとうございました。

十五・五話 お勉強

松代城の中。

私は、幸村を探して歩いていました。

「幸村？いる？」

「何でござるか？」

あ、やっと見つけた。

今日はなぜか人を見かけなくて、ちょっと寂しかったんだよね。

「よかったあ。今日はみんなどこか行ってるの？見かけないけど・・・」

「お館様と軍神殿は会議中、佐助は仕事でござる」

「そっか。幸村も仕事中心？」

幸村の手元には何か書類の様なものがあつた。
近くには筆と墨も置いてある。

「うむ」

「私はいない方がいいかな？」

「いや、構いませぬ」

お許しをもらつて幸村の側に座る。

幸村の手元の書類をのぞき込むと何かがびっしりと書き込んであつた。が、ほとんど読めない。

所々分かる部分もあるけど・・・そのせいでよけいに悔しい。

「うーん」

「咲夜殿？」

「あ、ごめん。なんて書いてあるのかほとんど分からないから、いい」

「この文書はかな文字ではござらん。仕方ありません」

あ、そか。この時代だと女の人は基本ひらがなしか使わないんだっけ？

「私たちのここでは女の人も漢字使うよ？」

「そうなのでござるか！？」

「うん・・・字体が違うから読めないんだと思う」

筆と紙を借りてそこに書きなれている文字を書いてみせる。

・・・筆で字を書くのって難しいなあ。

「所々分かるものもあるが・・・これは？」

「それは・・・」

その後、佐助が来るまで幸村と二人で文字の教えあいをしていた。分かるようになってくると・・・確かに今でも使ってるような文字が多いなあ。

帰る頃には古典が得意になってるかも。

同時刻：奥州

どこからか現れた黒い服をまとった人間に政宗が問う。

「何か分かったか？」

「それが、真田に拾われた以前の情報がまったくありません」

「Hum・・・まあいい」

そう言つて、政宗は笑みを浮かべた。

「待つてろよ。咲夜」

その言葉がいつたいなにを意味するのか・・・。
政宗以外は知る由もない。

十五・五話 お勉強（後書き）

・・・短いすね。

どうしてこう話の長さにムラができるのか・・・。
次の話から新章突入です。伊達主従、大活躍です。
楽しんでいただければ幸いです。

ありがとうございました。

第十六話 引き抜き

武田軍と上杉軍の同盟から三日後。

私は今、上田城の城下町にいます。

松代城から戻つてくるときにお館様がお小遣いをくれたので、それで草履を買おうかと思つて……。

実は、ずっと靴のままだったんですよね。

「どれにしようかなあ……」

服装は相変わらず男物なので、草履も男物を買つつもりですが……それでも、色々あつて決められません。

「これもいいなあ」

「こつちなんか似合うんじゃないか？」

「これかあ……ん？」

あれ？私は一人で来てたはず……。

と、言うよりこの声つい最近聞いたような……？

いや、気のせいだよ。きつと。

だってアノ人は奥州に帰つたはず。

「What your problem? どうした？」

「………！」

気のせいじゃなかった！

……気のせいじゃなかった！何で？！

「ちょ……ちょっと来てくださいー！」

「What?」

その人を人気ひとけの全くない細い裏道へと引っ張っていく。

「何でこんな所にいるんですか、政宗様!」

「An?」

「ここ、敵国の城下町ですよ!？」

「ああ。そうだな」

「見つかったら大変なんじゃないんですか!？」

「NO problem. 心配してくれてんのか?」

爽やか?な笑みを浮かべてそう聞いてくる政宗に一気に体から力が抜ける。

なんでそうなるかなあ。私一応武田の人間なんだけど・・・
まあいいや。

「で、どうしてこんな所にいるんですか?」

「お前に会いに来た」

「へえ・・・え?」

「俺はお前が気に入った。真田たちを通してもアンタに会えそうになかったからな。直接引き抜きにきた」

引き抜く?私を?

・・・そういえば、川中島の時もそんなことを行ってた気がする。

「・・・何を企んでるんですか?」

「Ann?」

しまった!!つい本音が!

だって戦略的に何の役にも立たないだろう私を引き抜こうとするな

んで、それを口実に何か企んでるって考えてもしようがない気がする……。

「まあいい。で、どうする？」

「？」

「俺と一緒に来るか？あの時は真田の忍に邪魔されたからな」

ああ、そのことが。

それなら答えは決まってるよね。

政宗には悪いけど……

「お断りします」

「……Why？」

「私は幸村に拾われた身ですから。なぜ政宗様が私を引き抜こうとするのかわかりませんが……幸村に恩を仇で返すようなことはできません」

ここで政宗のところへ行つてしまえば、私は幸村たちを裏切ることになる。

色々なところへ行けば元の世界へ帰れる方法が見つかるかもしれないとしても、それは嫌だった。

「そうか……OK.よくわかった」

「すみません。じゃあ……」

「I like it. 益々な」

「ええ！？」

あきらめてくれるのかと思ったら……あれ？
火に油注いじやった？もしかして。

「素直に引き下がると思ってたか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「俺は欲しいモノは必ず手に入れる。力づくでも」

なんか、危ない展開になってる気がする。

えっと・・・・うん。

ここは逃げるしかない！

ぱつと振り返って走り出そうとしたら腕を捕まれた。

とっさのことで、バランスがとれなくて転びそうになってしまっ

「わわっ」

「Are you OK？」

政宗が支えてくれて、安心したのも束の間。

その直後、首筋にどすつと鈍い衝撃がはしった。

「つ・・・・・・・・！？」

「Sorry」

一瞬呼吸が出来なくなっ

て、脳が揺さぶられる感覚がする。

最後に聞こえたのは、政宗の謝罪の言葉だった。

第十六話 引き抜き（後書き）

この話から、奥州編突入です！
ここからは、伊達主従が大活躍です。

ありがとうございました。

第十七話 奥州へ

- h
- $\cdot$
- $\cdot$
- $\cdot$
- $?$

なんか、揺れてる？

それにこれは……蹄の音？

ぼんやりする頭を軽く振って、何とか目を開く。

すると、周りの景色がかなりのスピードで後ろへと流れていった。

┐
•
•
•
!
?
└

え？なにこれ？「コゴ」？

さつきまで私は上田城の城下町にいて、そこで政宗に会って……

そこから、どうなったわけ？

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
○

ああ
思い出した。
。。。

「あー。政宗様？」

「目が覚めたか。 Good morning・咲夜」

一 確認のために声をかけてみれば、帰ってきたのは予想通りの声。

Good morningって、もう真昼間ですけど。

なんて心の中でつつこみつつ、挨拶はスルー。

「すみません。政宗様、いじょう。」

Stop

「**なんですか？**」

「政宗で良い。敬語もいらねえ」

・・・また唐突な・・・。

BASARAの人たちと仲良くなれるのは嬉しいけど、こんなでいいのかなあ？

まあ、政宗は言い出したら聞かない性格だし、確認するだけにしておこう。

敬語使わなくていいのは私も楽だし。

「本当にいいんですか？」

「ああ」

「じゃあ、ありがたく。それで政宗」

「Ann？」

「ここどこ？」

ざつと周りをみた限り、木々に囲まれた道のように見える。

私は馬に乗せられてその道を走っているみたい。

さすがに、気絶したまま馬に乗るような芸当は出来ないの（そうじゃなくても乗れないけど）政宗と二人乗り。

・・・なんか、嫌な予感しかない。

「上田から奥州へ続くHighwayだ」*Highway「街道

「もしかして、奥州へ向かって走ってる？」

「Of course」

・・・予感的中。

政宗と会話を始めた頃から薄々気づいてはいたけど・・・。

「誘拐って犯罪じゃないのかなあ」

「What do you mean?（何の事だ？）」

「・・・まあ、それはそれとして。上田に帰りたいんだけど・・・？」

白々しいよ。政宗。

関係ない話だけど、政宗の英語が全部わかるのは何でだろう？英語はそれほど得意じゃなかったけど・・・よく見るトリップ特典かな？

「だめだ」

ですよね。

でも、夕方までに帰らないと佐助に怒られちゃう。無断外泊なんてしたら幸村にまで心配かけるし。

「じゃあ、ここで降ろして！とにかく夕方までに帰らないと！」

「何かあるのか？」

「門限破ると怒られる」

「・・・Really？」

政宗が呆れと驚きの入り交じった複雑な表情をする。

確かに今、自分でも小さい子とか、一昔前の厳しい家みたいだなあ。とか思っただけさ！

あ、ここ戦国時代だから一昔前のくは当てはまらないか。

「と、とにかく。夕方までに上田に帰りたいの」

「無理だな。もう上田より奥州の方が近い」

「え・・・？」

「諦めろ。お前が自力で帰れる距離じゃねえ」

うう・・・確かに。

ここで降ろされても自力で上田まで戻れる気がしないかも。今日中に帰るのは諦めるしかないかなあ。

「・・・わかった」

しょうがない。後で誰かに頼んで手紙でも書いてもらおう。

そんなこんなで私は奥州の土を踏むことになったのだった。

第十七話 奥州へ（後書き）

あれ？

佐助がオカンになってしまいました。・・・本人登場してないのに。

次からちゃんと奥州です。城は青葉城の予定です。

あと、「伊達成実」しげさねが出てきます。

性格とか、その辺は完全私、桜耀の捏造ですのでご了承くださいませ。

ありがとうございました

第十八話 成実

ぎいっと、大きな門が開かれた。

門の内側にいた何人かの人々が私たち……というか、政宗に気づいてこちらに駆け寄ってくる。

「筆頭！」

「どこいつてたんスか筆頭！小十郎様が探してたつすよ」

「ああ、sorry」

「筆頭？そいつは……？」

話しかけてきた人達の一人が私に気づいた。

どうして良いかわからなかったので、とりあえず軽くお辞儀をする。

「俺の客だ。小十郎は……」

「梵！！」

「梵？」

誰かの声が政宗の言葉を遮った。

その声の正体らしい人が政宗のところへ走り寄ってくる。

梵、て政宗のことかなあ？

それにこの人、なんか誰かに似ているような……？

「梵！いつたいどこへ行ってたのさ！小十郎が……て、あれ？だれ？その子？」

「甲斐からの客人だ。手を出すなよ」

「へえっ！そうなんだ！俺は伊達^{だて}成実^{しげさね}、梵の従兄弟だよ。君は？」

伊達成実……って、あの伊達三傑の！？

そっか、どことなく政宗に似てるのか。従兄弟なら似てるのも当たり前だね。そりゃ。

見たところ、政宗よりも二つ上位・・・かな？

「望月咲夜です」

「咲夜ちゃんか！よろしくね！」

「・・・ちゃん？」

「あ、やっぱり男なんだ？でも“咲夜ちゃん”の方が呼びやすいからそっちで良い？」

「はい、まあ・・・」

男に間違われるのも慣れたものだし、実際は女の訳だから私はどっちでも構わないんだけど・・・やっぱり？

まあ、いつか。

成実さんって、ものすごいフレンドリーな人だなあ。

「で成実、小十郎がどうした？」

「あつ！そうだ、小十郎がカンカンに怒って・・・」

「政宗様！！」

「あ・・・」

政宗の名前を呼ぶ低い声が聞こえた。その声には怒気がかなり含まれている、気がする。

どうも、成実さんは少し遅かったみたい・・・。

青葉城の一角で、政宗とこじゅさんが向かい合って座っていた。その脇の、少し離れたところに私と成実さんが座っている。

「政宗様、どのようなおつもりか」

「・・・・・・・・」

「言付けの一つもなく急にどこかへ行かれるなど・・・」

「・・・・・・・・」

「その上、武田の人間を連れてきて・・・間者の手引きなどをされたらどうなさるのですか！」

「・・・信用されないのはしょうがないとして、本人の目の前でそこまで言いますか。こじゆさん。」

「いや、まあそれだけこじゆさんが政宗のことを心配してるってことなんだろうけど・・・」。

「もう連れてきちまったんだ。小言を言われてもどうしようもないぜ」

「それならば、すぐに武田のところへ返してきてください！」

「断る」

「なんか、子供が犬とか猫とか拾ってきちゃった時みたいな会話だなあ。」

「まあ、政宗^{むすこ}がちょっと反抗期だけど。」

「そんなことを思っ^てて二人を眺めていたら、ツンツンと横腹をつつかれた」

（ねえ）

（なんですか？）

（咲夜ちゃん、もしかして笛師？）

（はい）

（そっか！じゃあ後で笛きかせてよ！梵達に川中島での話聞いててさ、あのとき俺こっちに残ってたんだ）

（あの、たいしたものじゃないですよ！？）

成実さんに期待のまなざしを向けられる。

政宗はいつたいなんて話したんだろう・・・？

「咲夜」

「はいっ！」

急に声をかけられて驚いてしまった。

政宗達の方を見ると、いつのまにか話に決着が付いたらしい。

「部屋を用意する。ゆっくり休め。今夜は宴を開くぜ！？」

「あ、はい」

軍配は政宗にあがったみたい。

こじゆさんの方を見ると、苦虫を噛み潰したような顔をしている。心なしに眉間のしわが深くなっているような・・・。

（こじゆさん・・・なんか、ごめんなさい）

思わず心の中で謝ってしまう。

悪いのは私じゃない気がしないこともないけど・・・。
その辺は気にしないでおう。

第十八話 成実（後書き）

成実登場です。

彼は、咲夜の相談役になると思います。咲夜の友達その二ですね。

その一は、かすが。それ以上の存在になる事はありません。そのあたり、ご了承ください。

あと、彼は名前以外は全て私の捏造です！

年齢設定なども、私の都合のよいようにしてあります。真に受けないでください。

お願いします↑（懇願

第十九話 ホームシック

私は今、成実さんに連れられて広間へと向かっていました。広間に入ってびつくり。広間の中にはたくさんの人が・・・。

「welcome! 咲夜」

「ほえ？」

「いいか！咲夜は俺の客だ！手え出すんじゃないぞ！？Are you OK!？」

「Yeah!!!!!!」

「Good!! Are you ready guys!?!... Let's party!!!!!!」

政宗の声にわつと歓声が上がって、急に広間が騒がしくなる。私はいくと・・・怒濤の展開について行けていなかった。ええと・・・？

「驚いたか？お前の*welcome partyだからな」*歓迎会

「突っ立ってねえで座ったらどうだ」

「小十郎！そんな言い方しない！あ、咲夜ちゃんそこ座って？」

「あ・・・はい」

とりあえず成実さんに言われたところに座る。その前にはおいしそうな料理がたくさん並べてあった。

「ほら咲夜ちゃん！食べて食べて！」

「奥州の物はdeliciousだからな」

「あ、はい。いただきます」

近くにあったお皿から、パクリと一口食べる。
おひたしみたいだけど、すごく美味しい!!

「おいしい!!」

「ああ、小十郎が作った野菜だからな」

「そうなんですか！美味しいです！」

「・・・そうか」

「はい！」

上田にも山菜とか美味しい物が沢山あったけど、奥州も美味しい物が沢山だな」とくに、お米と野菜が美味しい！

・・・もしかしたら、このお米はあの娘が作ってるのかな？

「いつきちゃんが作ったやつだったらいいな・・・」

せっかく奥州にいるんだし、会えたらもつと良いんだけどなあ・・・。

宴も一応終わって、私は部屋の前の縁側で夜風に当たっていました。そろそろ寝なくちゃとは思ってるんだけど・・・どうも、落ち着かないんだよね。

（幸村や佐助に心配かけちゃってるよね・・・）

たった一日顔を合わせてないだけなのに、ずいぶん会って無い気がする。

・・・こつちの世界に来てから、いつの間にか上田城が帰る場所になってたからなあ。

・・・そういえば、家はどうなってるだろう。
もう、この世界に来てからひと月くらい経っている気がする。
こっちの世界も、すごく楽しいけど・・・

（家、帰りたくなってきたかも・・・）

「はあ・・・」

「咲夜ちゃん？」

ため息をついていたら、遠くの方から名前を呼ばれた。
振り返ると、成実さんが向こうの方から歩いてくるのが見える。

「成実さん、どうしたんですか？」

「ん？咲夜ちゃんの様子を見にね。咲夜ちゃんこそどうしたの？」
「いえ、ちよつと・・・心配かけちゃってるかなあ。と思って」

詳しいことを話すわけにはいかないので、軽く言葉を濁す。噓は言
つてないしね。

けれど、私の言葉に成実さんが怪訝そうな顔を向けてきた。

「え？どうして？」

「あ、え？あの、実は・・・」

あ、成実さん知らないのかな？

とりあえず、私が奥州に着た経緯を成実さんに説明する。かくかく
しかじか。

「…うそっ！！梵、咲夜ちゃん誘拐かどわかして来たの！？」

「はい…。それで、きつと心配をかけてしまっているの…文とか、
送れませんか？」

「いや、それは無理かも…。下手すると二国間の戦になる…たぶん」

「ええ!？」

たしかに、幸村と政宗は敵対してるんだから・・・武田の人間を政宗が攫えば十分な戦の理由になるのかな？
と、なると。同じ理由で上田に帰るのも難しいんだろうなあ。

「…はあ」

「咲夜ちゃん、ホントごめん。ウチの梵が…」

「そんな！成実さんが謝らないでください！」

とは言つたものの、気が重いなあ。

あの人に私は快く思われていないみたいだし・・・。
ポロリとそのことを零すと、成実さんは苦笑いする。

「ああ…。でも、小十郎は咲夜ちゃんのこと嫌ってる訳じゃないから・・・警戒してるだけ」

「そう、ですか？」

「うん。だからさ、地道に話しかけてみて？」

「・・・はい！」

来ちゃったものは来ちゃったんだし、こうなったら楽しまないと損だよな。うん。

よし！明日機会を見て、こじゅさんに話しかけてみよう！

第十九話 ホームシック（後書き）

あれ？政宗と小十郎がほとんど出てない・・・。

すみません。本ッ当にすみません・・・っ！

次回は！次回は本当に伊達主従（と、言うより小十郎）が活躍しますから！

・・・いや、もしかしたらこじゅさんの独壇場になるかもしれません。

いえ、訂正。なる“かも”じゃなくて、なります。きっと。

成実の出番はこれですばらく無いはずですよ。

ありがとうございました。

第二十話 お手伝い（前書き）

最近、初めてアクセス解析というものを知りました。
遅いってツツコミはしないでください。

で、話を戻します。アクセス解析を確認したら、総合で

P V 17,950 ユニーク 3,422 でした。

Σ(。Д。！？) うわぁ…ありがとうございます！ありがとうございます！
ざいます！本当にありがとうございます！まさかこんなに…ッ！
本当にありがとうございます！！

ひっ、ひとまず本編をどうぞ！！

第二十話 お手伝い

どうも、咲夜です。

私は今、部屋の前の縁側で笛の手入れをしています。
例にも例のごとくやることなくて・・・。

「お？」

向こうから歩いてくるのは、こじゅさん？

手拭いとか持つてるし・・・畑仕事でもいくのかなあ？

・・・よし！声をかけてみよう！

「片倉様！」

「・・・なんだ」

「畑仕事にでもいかれるんですか？」

「ああ」

うつ・・・こじゅさんが怪訝そうな、驚いたような、複雑な表情して
る・・・。

でも、負けるか！

「あの、私にもお手伝いさせてもらえませんか？」

「・・・なぜだ？」

「何もせずにいるのは、なんか申し訳なくて・・・」

「・・・好きにしろ」

「はい！」

すたすたと歩きだしてしまったこじゅさんのあとを追いかける。
よし！お手伝いするぞ！！

「これは抜いても良いやつですか？」

「ああ」

じゃあ遠慮なく。ていつ！

ふう・・・結構きれいになったなあ。この作業、結構楽しいけど・・・腰にくるかも。

「望月、そろそろ終わりにするぞ」

「あ、はい！！」

「おい、泥が付いてるぜ」

「え？どこですか？」

とりあえず頬を拭ってみても、汚れは取れていないみたい。むづ。

「・・・動くなよ」

「？はい」

見かねたこじゅさんが、手を伸ばして私の頬を手拭いで拭ってくれた。

そういえば昔、外で遊んで泥だらけになったときにお兄ちゃんが同じことしてくれたっけ。

・・・心配、かけちゃってるだろうなあ。

「・・・」

「どうした」

「あ・・・すみません。・・・すこし、家族のことを思いだして・・・」

「・・・お前の家族は上田にいるのか？」

こじゅさんに問われて、軽く首を横に振る。

ああ、なんか……。完全にホームシックだ。これ。

「私の実家は遠いところにあるので・・・いつ帰れるのか、分からないんです」

「そうか」

「はい・・・」

ふいに泣きそうになって、思わず俯いてしまう。

涙をこらえているとぼん、と頭の上に何かが乗る感覚がした。びつくりして顔を上げると、頭の上にのせられていたのはこじゅさんの手。

「悪いな」

そういつてポンポンと頭をなでてくれた。

一瞬驚いたけれど、なんだか嬉しくて思わず笑みがこぼれる。

「片倉様、ありがとうございます」

「ああ、それと、小十郎で良い」

「え？」

「政宗様のことも名前で呼んでるみてえだからな」

あ、そっか。政宗のほうが偉いんだもんね。その政宗を名前で（しかも呼び捨てで）呼んでるのに、こじゅさんを『片倉様』で呼ぶのはおかしいのか。

・・・でも、こじゅさん年上だよ？いや、政宗も年上だけど！でも二つしか変わらないし！

そつだ！ダメもとだけど・・・

「あの、じゃあ『こじゅさん』って呼んでもいいですか？……そのつ、片倉様は年上ですし！年上の人を呼び捨てにするのは何となく抵抗があるというかつ！！」

胡乱な顔をしたこじゅさんに、慌てて説明を付け足す。

すると、こじゅさんは納得したような顔をして「かまわねえ」と言ってくれた。

「ありがとうございます！！」

「いや……。ほら、行くぞ」

「はい！」

収穫した野菜の入ったかごを持ってこじゅさんの後を追いかけた。こじゅさんと仲良くなれた……。のかな？少なくとも、警戒は解いてももらえたよね？うん。

ちなみに、収穫した野菜はその日の夜においしく頂きました。

第二十話 お手伝い（後書き）

本当にありがとうございます！！読んでくださっている皆様にただひたすら感謝です！！

あ、それと、三話の頃から放置されているアンケート。区切りをつけたいと思います。

×切は 五月五日 までにしたいと思います。
反応が返ってこなかったら、私の好みで突っ走りますよ？けど、私としてはそれだけは避けたいんです・・・。

なので、ぜひ投票を！！投票は感想で送ってくださいませ。

感想、リクエスト、誤字脱字・間違い情報のご指摘等もいただけると、私が泣いて喜びます。なのでそちらも是非！！

長々と失礼いたしました。これから『夜に咲く』をよろしく願います。

第二十・五話　それぞれの想い（前書き）

ご報告があります。

アクセス件数がついに二万件突破しました・・・Σ（。D。！！）
ありがとうございます！本当に心からありがとうございます。

これからも宜しくお願い致します>（―――）<
夜に咲く　桜耀

第二十・五話　それぞれの想い

咲夜が奥州の地で畑仕事に精を出している頃……。
信濃の国、上田城ではピリピリとしたような、重苦しい空気が漂っていた。

「佐助！何か分かったか！？」

「何も……」

「そうか……。咲夜殿、どこへ……」

部屋の中に流れているその空気がいたたまれなくなって、佐助は立ち上がる。

「とにかく、旦那はここで連絡を待つてて」

「うむ……。頼んだぞ、佐助」

部屋を出ていく佐助を見送っても、幸村は座ったまま動かなかった。膝の上の手が、ギリッと握りしめられる。

「咲夜殿……」

咲夜と出会ってから、大した時間は経っていない。

それでも幸村にとって、彼女は家族も同然の存在になっていた。

だからこそ。今、何もできない自分がもどかしい。

けれど、自分が不用意に動けないことも十分わかっていた。下手に動いて敵対している人間に咲夜のことを知られてしまえば、後々危険な目に遭わせてしまうことになりかねない。

「……じっとしているのは性に合わぬ」

そうポツリと呟いた幸村は槍をつかむと外へと出る。
そのまま、頭の中の様々な思いを消すように一心不乱に槍を振るつた。

幸村が槍を振るいだした頃。上田城と城下町の間ほどの場所で、佐助も思い詰めたような表情をしていた。
そのとき、急に後ろから声をかけられる。

「猿飛、何かあったのか？」

「っ！かすが・・・」

いつの間にか近くに来ていたかすがに問われ、佐助は一瞬言い淀む。

「・・・・・・・・咲夜ちゃんが、いなくなった」

「なっ・・・・望月が！？」

「ああ・・・・かすがは、何か知らないか・・・？」

問い返してきた佐助の言葉に、かすがはいや、と首を振った。

「なにか、心当たりはないのか？・・・・まさか間者・・・」

「違う。・・・・かすがも、わかってるだろ？咲夜ちゃんからは・・・」

「

「・・・・そう、だな」

かすがの言葉を遮った佐助の声は、感情がかなり押し殺されたものだった。

それだけ、咲夜の身を案じているのだろう。

ちらりと見た佐助の横顔には、焦りと苛立ちが浮かんでいた。

「・・・私も、出来る範囲で情報を集めておいてやる」

「ああ・・・悪い」

「・・・・・・変わったな。お前も」

「え？」

ボソリと呟いたかすがは、聞き返した佐助に答えることなく背を向ける。

「じゃあな」

そう言つてそのまま姿を消してしまった。
それを見送つて、佐助は大きく息を吐く。

（間者・・・か）

かすがに問われるまで、その可能性は頭の中に全く浮かんでいなかった。

いや、浮かんでいなかったわけでは、ない。無意識のうちに、己の中で打ち消してしまっていただけ。

「人のこと言えないね。俺様も」

呟いて、自嘲気味な笑みを顔に浮かべる。

きっと自分は、咲夜に・・・彼女に想いを寄せている。
けれど。

（・・・これじゃ、忍失格だね）

忍に感情はいらない。

忍とは、主の影であり、戦の道具でしかないのだから。

ゆっくりと目を閉じると、息を大きく吸って、吐く。

次に目を開けた佐助の表情は、^{かお}自分の感情を心の奥底へと押し込めた表情だった。

「情報。集めに行きますか」

彼女は主の友人であり、自分の同僚。それ以上でも、それ以下でもない。

それでいい。

自分は忍なのだから。

それから数日。

情報が集まりつつあった幸村と佐助の元に、決定的な情報がもたらされた。

かすがの手によって伝えられたその情報は、

『右目に眼帯をした男が咲夜らしき人物を馬に寄せ、北へ向かった』
というもの。

つまり、咲夜は誘拐されたわけで。

その情報を総合的に考えると、咲夜を誘拐したのは幸村の好敵手でもある、竜と呼ばれる男だろう。

そして、咲夜を救出するために、幸村たちは動き出す。

第二十・五話 それぞれの想い（後書き）

最後かなり無理やりです。すみません。
その上、なんか長いです。すみません。

気を取り直してっ！

次からはまた、双竜のターン！！

やっとこさ政宗が活躍！のはず（＾―＾；）

ありがとうございました。

第二十一話 盗賊退治

どうも、お久しぶりです？咲夜です！

今、私は馬に揺られています。

言わずもなかもしれないですが、もちろん一人では乗れないので政宗と相乗り。

政宗・・・頼むから手綱を持って・・・！

あ、今私たちが向かっているのは奥州のある村です。

最近、その村の近辺に盗賊が多発するとかで。

村の人たちの手に負えないほどに、暴れているのだそう。

「政宗。その村ってどの辺？」

「もうじきだな。・・・ああ、アレだ」

政宗が示した方を見ると、確かに村のようなものが見えてきている。村につくと、政宗たちは早速村の人たちと話し合いを始めてしまった。

・・・つまり、暇になってしまっただけでして。

「はぁ・・・ん？」

何となく視線を巡らせたときに、こちらを覗き見るようにしていた男の子と目があった。

その子はすぐに、『しまった！』みたいな表情をして顔を引っ込めてしまう。

「この村の子かな・・・？」

ちょっと、話しかけてみようかな？

政宗たちから離れて、男の子が引つ込んだ家と家の間の路地のような場所をのぞき込む。

すると、さっきの男の子と、もう一人別の男の子がギョツとしたような顔をしてこっちを見ていた。

「なんだよ！なんか用か！」

「に、兄ちゃんっ！そのひと、さっき政宗さまといっしょにいた人だよ！」

うわあ。すっごい警戒されてる。

「えっと・・・何してるの？」

「関係ないだろっ」

「とーぞくを倒しに行くんだよ！」

「おいっ！人にいうなって・・・」

とーぞく・・・って盗賊！？

え？村の人たちの手に負えないから政宗たちが来たんじゃない・・・？

「危ないよ！？」

「分かってる！でも、危ないからって逃げてたら何にもならないだろ？」

「武器だつてよういしたんだぞ！」

うーん・・・。この子たち、本気みたい。

目が真剣だもん。燃えてます。

でも、危ないよねえ？

どうしよう・・・？

「とにかく、にーちゃん。このこと他の大人にバラすなよ！」
「いや、でも危ないし……。どうしても行くの？盗賊退治」
「いくよ！ね？兄ちゃん」
「つたり前だろー！」

むう。そつか。

けど、この子たちだけで行かせるのは危ないよね。やっぱり。

「私も一緒に行つていいかな？」

「へっ！？」

「え？大きい兄ちゃんいつしょに来てくれるの？」

「うん。付いていてもいい？」

私が付いていったところで、何か出来るわけでもないけど……。

「兄ちゃん、大きい兄ちゃんもいいでしょ？」

「……しょーがねーな。絶対足手まといになるなよー！」

「了解」

ある程度までいったら、説得して連れて帰ってくればいいよね？

あ、その前に出かけてくるって誰かに言つてかないと。

盗賊退治にいつてきます。

……なんてさすがに言うわけには行かないので、村の子供たちと遊んでくるとだけ政宗たちに伝えて出発！

「そういえば、君たちの名前はなんて言うの？」

「俺は弥助^{やすけ}。こっちは弟の加吉^{かきち}。にーちゃんは？」

「私は咲夜。よろしくね」

「うん！よろしくね。さくや兄ちゃん！」

うわあ！なんか、すごいかわいいよ。加吉くん！

弟が出来た気分！

ずっと弟とか妹とかほしかったんだよね。私、末っ子だったからなあ。

「なんか・・・」

「なに？弥助くん」

「にーちゃん、しゃべり方とか女みたいだ」

「え！？そ、そうかな！？」

「ああ」

「さくや兄ちゃん。背もそんなにおつきくないしねえ」

・・・そうか、見た目が男でも中身までは変わらないか。さすがに。当たり前前って言えば当たり前ですが・・・。

これから初めて会う人に対しては、一人称、変えようかな？

・・・僕、とか？

と、それはまあ置いて。

てけてけと村から三十分ほど歩いたところで見えてきたのは、鬱蒼と木々が茂る森。

ものすごい雰囲気が出てます。

”いかにも”って感じ。

あそこに盗賊のアジトがあったりして。

「あの森の中に、盗賊がねぐらにしているとこがあるんだ」

「！？へ、へえ・・・」

うわ、ホントに！？？ベタな気がする！っていうか、途中で村に帰ろうと思ってたのに！

「加吉、武器は持ってるな？」

「うん!!」

「ちよ、やっぱり一回村に戻らない？盗賊、強いんでしょ？三人だけじゃ危ないよ？」

二人が持つてる武器も、鎌とか木の棒とかだし。けど、弥助くんも加吉くんもやる気満々みたい。困ったなあ……。

「怪我でもしたら大変だし、今日は敵情視察ってことじゃダメかな？」

「ダメだよ!!」

「俺たちの村は俺たちで守る!!盗賊は俺たちが倒すんだ!」

「ほお？餓鬼が言ってくれるじゃねえか」

「っ!？」

突然後ろから聞こえてきた声に振り返ると、何というか……人相の悪い男の人が立っていた。

その顔にはニヤニヤと嫌な笑みが浮かんでいる。

もしかして、盗賊……？

これって、かなりピンチかも……。

第二十一話 盗賊退治（後書き）

この話、次の話と前編・後編になります。

長い上に前・後編かよ！？

そして、武将が誰も出ていない・・・。

次の話では、（と言うか次の話こそは）政宗が活躍します。
早めに次の話も投稿・・・したいと思います。はい。

ありがとうございました。

第二十二話 絶体絶命！？（前書き）

前回の後書きで「なるべく早く続きを…」とか言っというて遅くなりました。

本当にすみません・・・。

今回、かなり長いです。しかも二本立てです。

上手く話を区切る事が出来なくて・・・。

二重ですいません。> (——) <

第二十二話 絶体絶命！？

ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべる男。

気が付けば、その後ろにも何人か男が立っていた。

おそらくは、全員盗賊の一味。

「お前等っ！盗賊だなっ！？お前等なんか、俺が倒してやるっ！！」

「

くっ、くくく。お前等みたいな餓鬼が、俺らを倒す？チャンチャ

ラおかしいぜ」

「うるさいっ！！」

盗賊たちの挑発に完全に乗ってしまった弥助くんが、その男に突っ込んでいく。

「覚悟しろっ！！」

「ハッ。ほらよ」

男は弥助くんのことを鼻で笑い、そのまま足を引っかける。

男は転んで地面に倒れた弥助くんの襟首をつかんで持ち上げた。

「そいつら、どうするんですかい？」

「そうだな……。売り飛ばせば多少の金にはなるだろう。なるべく傷を付けるなよ！特に、その男にはな」

そう言った男が見てるのは……。私！？

「物好きなお偉いさんが喜ぶだろうよ。高値で売れるかもしれねえ。もったいねえな。女だったらもつと高く売れたらうに」

そこまで聞いて、やっと気がついた。
この人達、私と弥助くん、加吉くんを売ろうとしてるってこと・・・
？

「放せっ！！放せよおっ！！」

「うるせえな。お前等に傷は付けたくねえんだよ。黙ってる」

「っ・・・ぐうつ・・・」

「！！兄ちゃんっ」

男にぶら下げられたまま、必死にもがく弥助くんの首を男が締めあげる。

「っ・・・くそっ・・・」

「！？痛ってえ！！」

以外にも、悲鳴を上げたのは盗賊の男だった。

その手には、小さな歯形がくつきりつついている。

弥助くんが男の手に噛みついたみたいだ。

男は反撃されるなんて思ってたんだらう。弥助くんを放してしまっていた。

逃げるチャンス！！

「弥助くん！目、閉じて！」

叫ぶのと同時に、足下の砂をつかんで盗賊たちに向かって思いっきり投げつける。

「うわっ、痛えー！！」

「くそっ」

砂が目に入つて目を閉じた盗賊たちの横を、弥助くんと加吉くんの手を引いて駆け抜けた。

けど、こんなのじゃすぐに捕まってしまうだろう。下手をすれば・・・火に油を注いだけかも。

「にーちゃん！こつちだ！」

「え！？」

「さくや兄ちゃん早くっ！おれ達しか知らない近道があるんだよ！
！」

「ホント！？それなら逃げられるかも！」

二人に引つ張られて細い道をひたすら走る。

しばらく走ると、行きの時も通つた道に出た。

まだ村までは距離があるけど、ここから村までは一本道。走るしかない！！

とはいえ、そろそろ辛いかもツ・・・！

「あつー！！」

「にーちゃん！！」

「さくや兄ちゃん、大丈夫っ！？」

「だい、丈夫・・・。。。。っ！？」

こんな時に限つて転ぶとか・・・っ。

あわてて立ち上がろうとしたときに、足首に鈍い痛みが走った。まさか・・・足、ひねっちゃった・・・？

後ろからは微かにだけ盗賊達の声が聞こえてきている。

「弥助くん！加吉くん！行つて！！」

「でも、さくや兄ちゃんは！？」

「私は大丈夫だから！それよりも、誰か大人に伝えて助けにきてもらって！」

「行け！加吉！にーちゃんは俺が連れてくから、誰か大人に知らせてこい！！」

弥助くんの一声で、おろおろとしていた加吉くんは決心が付いたみたい。

コクリと頷いて、村の方へ向かって走り出していった。

けど、弥助くんも残ってたら駄目だって！！

「弥助くん！弥助くんも・・・」

「いいから！にーちゃん、立てる！？」

「たぶん・・・」

捻ってしまった方の足に体重をかけてしまわないように、慎重に立ち上がる。

けれど・・・

「おっと。そのまま座ってるよ」

「！！！！！！」

ぐいっと、後ろから首に何かを押し当てられた。

聞こえた声は、さっきの盗賊のもの。

もう追いつかれた！？

「よくもまあ、やってくれたじゃねえか」

「なにすんだ！！」

「弥助くん」

男に飛びかかろうとした弥助くんを制止する。

横目で首に押し当てられたものを確認すると、鞘に入っただけの刀だった。

この状態だと、簡単に鞘から抜けるだろうな……。

「売りさばいてやろうと思ってたが、気が変わった。ここで殺つてやるよ」

「……………」

悪役臭いセリフだなあ……。

つて、そんなことを考えてる場合じゃない！！

とにかく、加吉くんが助けを呼んできてくれるはず。

それまで時間を稼がないと！

「……僕を殺せば、あなたたち、只じゃ済まないですよ。僕はこれでも、政宗様に使えていますから」

正確には、政宗に使えていないけど……嘘も方便。

あ、一人称が僕になつてるのはさっき思いついたことの実践です。

「だからなんだ？大勢いる手下の一人にしか過ぎねえだろ？」

「……ええ。そうですね。大勢の中の一人です。けれど……」

そこでいったん言葉を切り、おおきく息を吸った。

「けれど、政宗様はその一人ひとりを、とても気にかけてくださる方ですから。じきに痛い目見ますよ。きつと」

「そうかよ。そうなったら河岸替えするだけだ」

「……やっぱ、こんなんじゃ駄目か。」

なんか、言ってることが脅しっぽいよね、私。

人間、本当にピンチになると案外冷静に物事を考えられるものですねえ。

「もう無駄話は終わりだ」

「……………っ!!」

もうちょっと時間を稼ぎたかったけど…………。

せめて弥助くんは守らないと。

弥助くんを抱え込むと、しっかり抱きしめた。

「じゃあな」

首もとに押し当てられていた刀がはずれ、鞘から刀を抜く音が聞こえる。

すぐに襲ってくるだろう痛みを覚悟して、堅く目を閉じた。

……………。

…………あれ？

「女子供相手に刀振り回すなんざ、coolじゃねえぜ？」

「お前…………！」

「!!!!!!」

痛みどころか、なんの衝撃もこないのを不思議に思っていると、聞こえてきたのは英語混じりの言葉。
振り返ると、蒼い人影が振り降ろされた刃を自分のそれで受け止めていた。

「政宗!!」

「その子供、放すなよ」

「あ…………はい」

なんか、政宗の声が冷たい・・・？

「お、親分！どうしやすか！？」

「数ではこっちの方が有利だ。やっちまえ！！」

その一声で、手下達が一斉に政宗に飛びかかる。
けれど・・・

「ぐあっ」

「ガハッ」

「うぐ・・・」

政宗に飛びかかった手下達は次々と倒れていった。

血は・・・全く出てない。

すごっ、峰打ち！？

気がつけば、いつの間にかこじゅさんも来ていて。

十人以上いた盗賊達は、全員あつと言う間に地面にたおれることになった。

流石というか何というか・・・強いなあ。

第二十二話 絶体絶命！？（後書き）

二十二話へ続きます。

流れで読んでくださいませ。

第二十三話 衝撃の事実

二人の強さに呆氣にとられていたら、村の方から蹄の音が聞こえてきた。

その音に、振り返ったままだった体勢を元に戻す

「梵ー！小十郎ー！村の人たち連れてきたよー」

「兄ちゃん！さくや兄ちゃん！」

「成実さん！加吉くん！」

村の方からかけてきた馬に乗っていたのは成実さんと加吉くん。その後ろには、荷車とかを牽いた村の人たちがいた。

成実さんに馬から下ろしてもらった瞬間、加吉くんが弥助くんに飛びついてくる。

「兄ちゃん！！良かったあ！良かったよお！！」

「加吉っ！！政宗様達、お前が・・・？」

「うんっ、途中で・・・まさむね様たちにあつて・・・」

そういつている加吉くんの顔は涙でグシャグシャだ。

怖い思いをさせちゃったなあ・・・。

「加吉くん、ありがとう。ごめんね？」

「ううんっ・・・」

フルフルと首を振る加吉くんの頭を、感謝と謝罪の気持ちを込めてゆっくりとなでる。

「弥助、加吉。帰えるぞ」

しばらくして村の人たちに声をかけられ、弥助くと加吉くんは一足先に村へ戻っていった。

ちなみに、村の人たちが牽いていた荷車は盗賊たちを運ぶためのものだったらしく。縄で縛られた盗賊たちも気絶したまま村へと運ばれていったのだった。

「でも、二人が無事で良かった・・・」

「咲夜」

安堵の息をついたとたんに、後ろからかけられた声に私はビキリと固まる。

かけられた声は政宗のもの。けれど、その声は明らかに怒っている声だった。

・・・知り合って間もない私が、顔を見なくても分かる程度には。例えを使うなら『背後に吹き荒れるブリザードが見えそう』ですね。たぶん。

「咲夜」

「は・・・はいっ!」

返事はしたものの・・・政宗の方をみる勇氣は無いです。はい。

冷や汗を感じながらただひたすら前を見ていると、政宗は私の前に回り込んで目線を合わせてきた。

これは・・・目を逸らしたら負けな気がする。

「・・・」

「・・・」

にらみ合いが続くことしばし。

先に諦めたのは政宗だった。以外にも。

「・・・OK、説教は後回しだ。咲夜、stand up!」
「はい・・・ッ痛!？」

立ち上がるうとして、足の痛みにバランスを崩す。

政宗がとつさに手を出してくれたおかげで、倒れずには済んだけど・・・。

そつだ、足捻っちゃってたんだっけ・・・。

「Are you okay？」
「ごめん・・・足、捻っちゃったみたいで・・・」
「ったく」

政宗は、ため息をついたと思ったら、私をぐいつと抱えあげた。
つまり、姫抱き。

「まつ、政宗えっ!？」
「Calm down・落とされたくないやな」*Calm down：落ち着け

この高さから落ちたらかなり痛いと思う。政宗、背え高いし。
にしても、これは恥ずかしすぎるって!!

ほら、こじゆさんと成実さんも微妙な顔してる!!

・・・まあ、そりゃそつだよねえ。私、男だと思われてるはずだし。

「掴まってないと落ちるぜ？」
「うえ!?!いって、降ろしてっ？」
「自分で歩けるのか？」
「う・・・」

それを言われると・・・。

仕方なく、政宗の肩のところをぎゅっとつかむ。

マンガとかでよく見る首に手を回すのは出来ません。恥ずかしくて。

「あ、咲夜ちゃん。腕擦りむいちゃってるよ?」

「え?どこですか?」

成実さんに言われて、自分の腕をみる。

あれ、ホントだ。

さっき転んだときに擦りむいてしまったらしく、うつすらと血が滲んでいた。

・・・気がついちゃったら、なんか痛くなってきた。

思わず眉間にしわが寄ってしまう。

「戻ったらまず治療だな」

「すみません・・・」

「咲夜、ladyなら身体を大事にしるよ?」

「ごめんなさ・・・って、え!?!」

あれ?ladyって・・・女性に対して使う言葉だよね?

「私、政宗に言っただけ?女だって」

「いや。*I've never heard of that.
*聞いていない」

「え?じゃあなんで・・・」

「ちよつ、待って!梵、咲夜ちゃん。一体どういうこと!?!」

じゃあ何で知ってるの?と聞こうとして、成実さんに待ったをかけ

られる。

「what?」

「まるで、咲夜が女だと言っているように聞こえるのですが・・・」

「そう言ってるからな」

「え? ウソツ! ?」

成実さん、かなり驚いているようです。こじゅさんにいたっては、完全にフリーズしてますね。男だと思っていた相手が実は女でした。なんて、そりゃびつくりするよね。

・・・話を戻しましょう。

「で、政宗。何で私が女だって知ってるの? 私、言っていないよね?」

「ああ。だが、そんなもん触れば分かるだろ?」

「つ*#×¥%!?!?しっ・・・おっ降ろして! やっぱ無理でも自分で歩くっ! !」

一瞬「信じらんない!」と叫びそうになったのを堪えたのは、偉いですよね?

成実さんとこじゅさんは、どことなくジトツとした視線を政宗に向けている。

「梵、最低・・・」

「・・・政宗様?」

「Hold on! 勘違いするなよ! ? 男と女じゃ、骨格からして体つきが違っだろ! ?」*ちよつと待て

ボソリと呟かれた成実さんの言葉と、こじゅさんの普段より少し低くなった声に、政宗が慌てたように弁解する。

・・・ああ。なんだ、そういうことか。びつくりした。

「じゃあ、いつから気がついてたの？」

「Ahー。お前を奥州こうちに連れてきたときからだな」

「え？じゃあ、上田の城下で会ったときは分かってた？」

「いや、その後だ。お前を抱えた時に気づいた。まあ、薄々そんな気はしていたけどな」

抱えたとき？あ、そっか。あるとき私、政宗に気絶させられて・・・。

「というか、私、政宗に攫さらわれたんだっけ」

「・・・政宗様、それはどういったことですか？」

「あゝそっいえば」

「*Who knows?なんのことだ？」*さあ？

とぼけて見せてもこじゅさんは甘くない。

村に戻った後、私も政宗も（私は治療をされた後で）、しっかりと絞られました。

まあ・・・結局、私よりも政宗の方がこつてりと怒られていました
が。

第二十三話 衝撃の事実（後書き）

お疲れさまでした・・・。
すいません。長いです。

これからも、飽きずにご贔屓にして頂ければ幸いです。

ありがとうございました。

第二十四話 実感（前書き）

今回の話も長めです。
毎度毎度すいません・・・。

第二十四話 実感

どうも、咲夜です。

盗賊に、後一步のところで殺されそうになったり、政宗に姫抱きされたり。

私が女だという事実がこじゆさんたちにバレたりした、その日の夜。私達は、弥助くんたちの村の、村長さんのお宅にお世話になります。

「慣れない部屋で一人って・・・怖いなあ・・・」

しかも、真っ暗だし。

本来なら、政宗たちと一緒に部屋に泊まる予定だったんですけど・・・。

私が女だとバレたことで、まあ一悶着ありまして。

結果、一人部屋。

・・・正直言つて、別に問題ないと思うんですけどねえ。

私なんかには、手え出すとあり得ないでしょうし。

閑話休題。

「はあ。に、しても・・・」

結構効いたなあ。お説教。『間に合ったから良かったものの、そうでなかったら確実に死んでいた』そう言われて、ハツとした。

心のどこかで、B A S A R Aの世界に来たことを現実として受け止め切れていなくて・・・漠然と、危ない目に遭うことはない気がしていた。結局、それは大きな勘違いで。

それでも、自分だけならまだいい、と思う。

「いや、良くはないけど。死にたくはないけど！」

でも、もしかしたら目の前で弥助くん、加吉くん兄弟が死んでしまっていたかもしれないと思うと、ゾツとする。

この世界は、人が死ぬのが当たり前前の世界。・・・そして、きっと人を手にかけることも。

「・・・誰かに、体術でも習つとけば良かったなあ」

私みたいな、自分の身一つ守ることも出来ない人間が周りをチヨロチヨロしていても、絶対に足手まといになる。

それは、嫌。やっぱ、できるなら幸村とか政宗とかの近くにいたいし。

「・・・今からでも遅くないよね。暇を見つけて馬術とか体術とか誰かに教えてもらおう。うん」

そうと決まればさっさと寝よう。きっと明日も朝早いし。自慢じゃないですが、寝付きはいいんですよ。

ふと気が付いたときにが立っていたのは、何も無い、ほの白い空間。そういえば・・・前にも、こんな夢を見た気がする。あれは確か・・・そう、こちらの世界に来たばかりの頃。

けれど、今回は前のように人影が見えることはない。それならば・・・

咲夜、力が欲しいか？

「！！！」

思った通りだ。また、この声。
少し低めの、落ち着いた雰囲気を持った、声。

「あなたは、誰？」

前も、言っただろう。知らなくて良い。今は、まだ。それよりも・
・力を、望むか？

「・・・自分の、身を守る程度は」

問うても、欲しい答えは返してもらえない。
それなら大人しく聞かれたことに答えよう。
さらに質問は続く。

なぜ、望む？

「みんなに迷惑をかけたくないから。足手まといになるのは嫌」

それだけか？

「それだけって・・・」

いや、確かにそれだけじゃない。
本当は・・・

「怖かった・・・」

・・・

「殺されそうになって、その時は必死だったけど、ほんとに怖かった・・・！」

死ぬことが、か？

聞かれて、咲夜は首を振る。

「自分が死ぬのも、怖かったけど。それよりも弥助くん達が殺されるようなことになったらって・・・。そっちの方が、怖かった。目

の前で誰かが殺されるかも、なんて、今まであり得ないことだったから」

自分にとっての当たり前が、こちらでは当たり前じゃないことを強く実感した。

ならば、お前が望むのは敵を倒すための力か？

「・・・ううん。私に、人を傷つける覚悟は絶対出来ない」

今まで平和で穏やかな世界でのほほん、と暮らしていた。そんな覚悟が出来るほど、強くはない。

「だから、もしも・・・もしも、特殊な力を手に入れられるなら、守るための力が欲しい」

・・・そうか、お前らしい

そついった声は、とても穏やかな、どこか懐かしむような声色が混ざっていた。

そこまで、意識できているのならば大丈夫だ。・・・月読つくよみの力は、お前の望む形になり、受け継がれる

「受け継がれる？・・・そもそも、月読の力って何？」

相変わらず、この声の主が言う言葉は要領を得ない。

気をつける。月読の力は大きい。人の身には過大な程に。大きすぎる力を望めば、己の身がそれに蝕ほしむまれる

以前にこの夢を見たときも、似たようなことを言っていた。それほど、大切なことなのだろうか。

・・・わからないことが多すぎる。
まるで、そんな心を読みとったかのように声は続く。

時がくれば、全てをお前に話そう。それまでは、待つてほしい
「・・・わかりました。けれど、“時” って・・・？」
そう、遠くはない。・・・そろそろ、限界だな
「え？ 何・・・」

何が？ と聞きかけたところで、視界が真っ暗になる。
目が慣れてきたときに見えてきたのは、木の天井。
今晚泊まらせてもらっている、村長さんのお宅の一室の光景。

「・・・また、聞きたいこと聞けなかった」

質問、したのに答えてくれないんだもんなあ・・・。けれど、時が
くれば全て話すと言ってたし。それまで待つてみよう。
まあ、焦ったってどうこうなるものじゃないでしょうしね。
とりあえずは・・・まだ夜中のようなので、朝まで眠ることにしま
す。
それでは、お休みなさい。

第二十四話 実感（後書き）

久々な感じです。

この夢や、夢に出てくる声。忘れないであげてくださいますように、正体も明かせると思いますゆえに・・・。

ありがとうございました。

第二十五話 最北端へ！！

不思議な夢を見た、次の日。

またまた私は馬に揺られておりました。

・・・いえ、【揺られている】なんて生易しいものじゃありません。なんせ、馬は全力疾走していますから。何度舌を噛みそうになったか・・・。

「こじゅさん・・・あとどれくらいで付きますか・・・？」

「もう四半刻（約30分）程度だ。・・・少し、休むか？」

「いえっ！大丈夫です！」

あ、今回はこじゅさんの馬に乗せてもらっています。

さすがに、この速度で走る政宗の馬と一緒に乗る勇氣は無かったもので・・・。

かなり速度が上がるまで、手綱持ってくれないんだもん。

閑話休題。

いま、全速力で馬を走らせて向かっているのは青葉城ではありません。

そもそもこのきっかけは、今朝のこと・・・。

私は政宗の部屋で、本日の予定確認をしていました。
なんか遠足みたい。と、それはともかく。

「今日はこのまま城へ戻るの？」

「いや・・・一揆が起きたらしい。それを鎮めにいく」

一揆？

・・・その単語で半分寝てた頭が一気に覚めた。おかげさまで。

いや、だって。奥州で政宗で一揆だよ？

銀色の髪を二つに結い上げて、ハンマーを持ったあの娘が思い浮かぶのは私だけじゃないはず。

「・・・その一揆、どこで起こったの？」

「northernmost tip・・・最北端だ」

やっぱり！・・・やっぱりッ！

いつきちゃんだよ。いつきちゃん！ぜひ会いたい！

うわ、なんかテンション上がってます！

「咲夜、どうする？」

「なにが？」

「先に城に戻ってるか？」

政宗が続けた言葉に、私はピタツと固まる。

あれえ？てつきり連れていってもらえると思ってたんだけど・・・。

「どうして？」

「今回は、何があるか分からねえ」

「それに、足も捻ってるだろう」

・・・ごもつとも。

いつきちゃんたちは本気だし（いや、政宗たちは知らないはずだけど）。私は一時的とはいえ、立てない程に足を捻ったわけだし（もう何ともないです。驚異の回復力！）。その上、戦力にはならないし（むしろ足手まとい！？）。

でも、一緒に行きたい！

「足は大丈夫です！絶対に足手まといにならないから、私も連れてつってください」

「・・・どうしてそんなに行きたいの？」

いつきちゃんに会いたいから。

・・・なんて言えるか！！

でもまあ、実はあと一つ理由があるんですよ。

「政宗もこじゅさんも成実さんも、最北端に行くんですよ？」

「ああ」

それじゃあ、私、青葉城に一人取り残されますね。

忘れられてるかもしれないですが、一応私は甲斐の人間です。つまりは敵国の人間。

それは、ちよつと気まずいです。いくら馴染んだとはいえ。

「一人で置いて行かれるのは嫌だなあ・・・と」

「・・・はあ」

うわ、でつかいため息吐かれた！？

あゝ。やっぱ駄目かなあ・・・。今回は大人しく留守番かあ。いつきちゃんに会いたかった・・・。

「I'm between a rock and a hard place.Wanna come along?」(しょうがない。一緒に来るか?)

「うん・・・今回は大人しく留守番を・・・って、いいの!?行くっ！行きます!!」

・・・はい、回想終わり。

まあ、そんな会話がありました。最北端の地・・・つまりは、いきちゃんの村へと向かうことになったわけです。

弥助くんや加吉くんたちと、『絶対にまた来るから』と約束して出発しました。

あと、30分ほどで、到着です。

第二十五話 最北端へ！！（後書き）

ついに、いつきちゃんが登場しますよー。

あ、それと。作者は英語がとっても苦手です。

なので、筆頭が使っている英語は電子辞書に頼り切っています。使う所や、文法、スペルなどが間違っている可能性かなり大きいです。

ですので、ここの筆頭の英語を信じないでください！
大事なことなので二度言います。

ここの筆頭の英語を、信じないでください！！

ありがとうございました。

第二十五・五話 憧れ（前書き）

久しぶりの投稿です。

ここのところ忙しくて・・・。

申し訳ありません。

第二十五・五話 憧れ

最北端へ向かうことが決まり、出発の準備を始める中。私は弥助くん達と別れを惜しんでおりました。

「咲夜兄ちゃん、もう行っちゃうの？」

「うん……。けど、絶対にまた来るから」

そういうと、加吉くんはコクツと頷いてくれた。

向こうの方では政宗達が何かを話し合っているのが見える。出発までは、もう少し時間があるかな。

「にーちゃんも絶対また来いよ！」

「さくや兄ちゃん、約束だよ！絶対また遊びに来て！！約束だからね？」

「もちろん、約束。指切りしよっか？」

言いつのつてきてくれる二人と、約束を交わす。小さい頃、約束をしたときに必ずやってた指切り。

「にーゆーびきーりげーんまーん うーそつーいたら針千本飲ーます！指切った！！」

勢い良く腕を振って、指切りをする。

三人で笑いあっていたら、話の終わった政宗達がこちらへやってきた。

「咲夜、そろそろ行くぞ」

「あ、わかった！じゃあ、弥助くん、加吉くん……」

また、絶対に来るからね。

そう言おうと思って弥助くん達の方に顔を向けると、弥助くんが緊張したような顔をしていた。

そして、ギュッと手を握りしめると政宗に声をかけた。

「あ、あのっ！政宗様！」

「ん？」

「俺、将来もつと強くなつて、それで、政宗様の軍に入りたいです
！！」

真剣な表情の弥助くん。きつと、弥助くんにとっては、政宗に声をかけるだけでもすごい勇気が必要。それなのに、こんな宣言までしちゃうなんて。

それだけ、本気なんだろうなあ。

「良い覚悟してんじゃねえか。OK・大歓迎だぜ」

「ホント！？」

「に、兄ちゃんだけズルい！！おれも、まさむね様におつかえする
！」

政宗はニヤリと笑うと、弥助くんと加吉くんの頭をわしゃわしゃとかき回した。

「良い心掛けだ。だが、本当に俺の軍に入りたいならもつと強くな
らねえとな」

「「はい！」」

「しばらくはウチの奴らがここに残る。そいつ等に色々と教えても
らえ」

「「はい！！」」

その様子は「微笑ましい」という、言葉がピッタリだ。
こじゅさんたちの方を見ると、こじゅさんも成実さんも顔が綻んでいる。

「なんか、微笑ましいですね」

「うん。昔の梵と小十郎を思い出す」

「ああ。政宗様も立派になられた」

政宗に聞こえないようにコソコソと会話をする。
昔の政宗とこじゅさん、あんな感じだったんだ。
政宗達の方を見ると、弥助くんと加吉くんはきらきらした目で政宗と話している。

「弥助くん、加吉くん、頑張つてね」

「修行に励めよ」

「そうそう。じゃないと、梵が先に天下を取っちゃう。ね、梵」

「Of course!」

成実さんがさりげなく爆弾発言をした気がする。
政宗自信満々だし。隣でこじゅさんもさりげなく頷いてるし。
まあ・・・いいかな。突っ込みは入れなくても。

そんな風にほのぼのと話す咲夜たちを、ひっそりと見るいくつかの影。

「くそ・・・」

「落ち着け、正面から言ってかなう訳がないだろう」

「なら、どうやって・・・」

「アイツが一人になったところを狙う。人質にはピッタリだろう」
にや、と唇を歪めた男の目線は、咲夜に据えられていた・・・。

第二十五・五話 憧れ（後書き）

お久しぶりです。

これからは、またこまめに更新していきたいと思います。
できたら・・・いや、きっちりやります。はい。

次は最北端のあの娘がやっところさ登場する予定です。
ありがとうございました。

第二十六話

季節（前書き）

久しぶりの投稿です……。PCが調子悪い（T-T）
ケータイ打つのは苦手なので、しばらく亀より遅いペースになると
思われます。

第二十六話

季節

奥州、最北端の地。

そこで私たちは、轟音をたてて崩れる雪玉を前にしていました。

「季節感無視!？」

「まったくだ」

いくら最北端といえど、今は雪があるような季節じゃないんですよ。実際に周りには草が茂って、花が咲いて、水田には緑の稲がそよそよしてるんですよ？
それなのに……。

「ゆーきだーるまごーろごろ」

「うわっまた来た!！」

「成実さん、危ないですよ!そっち行きすぎちゃダメです!！」

いつきちゃんがいれば、季節とか関係ないじゃん。てことをすっかり忘れていました。
あの娘、技で巨大雪玉出せるもんね……。吹雪とか起こせちゃうもんね……。

「仕方ありません。政宗様、あちらの道を行きましょう」

「そうするか。無理にこの道に行く必要もねえ」

「あ。政宗!こじゅさん!気をつけて……」

あつちの道は、ゲームだと【雪の下から伏兵出現!】ってなるルート。雪は無くても、地面の下とかから普通に出てきそうだし。

『わあああああつ！』

やっぱり！

でもさすがに地面の下はなかったですね。

周りに積み上げてあった藁の中などからでした。

「咲夜、下がれ！」

「はいいっ！」

ビックリして変な声が出ちゃった……。

思ったよりすごい迫力なんですよあつ！

そんなことを知るわけもなく、襲い掛かってくる農民さん達。

そしてその人達を峰打ちで倒していく政宗達。

……峰打ち、だよね？ちょっと不安になってきた……。

「これがゲームなら……」

「何か言ったか！？」

「何でもないです！」

これがゲームなら、名前が上に出ている人を倒すだけで良いんだけど……。

現実で起こっていることだから、そういう訳にも行かないですね……。

……。

あ、でも伏兵ゾーン抜けた。

その後も果敢に向かってくる農民さん達を倒しつつ進んでいくと……。

「い・つ・き・ちゃああああん！！！！」

ピンクの法被を着た集団が。
おお……。いつき親衛隊だ……！

「いつきちゃん！！愛してるだー！！！！」

「エへへ…／＼いつきもありがとうなー！！」

「……なんだ、アレは？」

「さて……？」

ちよつとポカンとしている政宗とこじゅさん。……うん、その気持ち
ちなんとなく分かる。

「梵、あの人たちを倒さないと、進めないみたいだ」

「ああ。いくぞ」

こじゅさんが無言で頷いて、三人がパツと分かれる。
それほど経たないうちに、通称『いつき門』が開かれました。

この先にいつきちゃんがいる！けど、確かまた雪玉を突破しないと
いけないっけ……。

第二十六話

季節（後書き）

お久しぶりです。

前書きの通りしばらくは亀より遅く……。でも頑張りますので！

それと、ユニークが4000越えました！本当に、本当にありがとうございます〇（＾　＾）〇

次回は（やっと）いつきちゃんが登場です。

ありがとうございました。

第二十七話

扱い（前書き）

ユニーク6、500人突破!!

ありがとうございます（ノ）（感涙）

第二十七話

扱い

目の前を転がる、巨大な雪玉。先は一本道。

「今度はここを進むしかなさそうだな」

「気を付ければ大丈夫だと思うよ？この雪玉、軽く攻撃すれば簡単に崩れるだろうし」

「……なんでそんなことを知っているんだ？」

「え？あつ！！いや、何となくそうかなあ。って思っただけです！」

「……そうか」

しまった！つい口が滑った！

こじゆさんに怪訝な顔で聞かれて、慌てて取り繕う。とりあえず納得してくれたみたい。

その後、何人か伊達の兵士さんが巻き込まれながらも、なんとか雪玉ゾーンを突破。

その先の、広場のような場所の真ん中に、一人の女の子が仁王立ちしていた。

二つに分けて三つ編みにした銀髪。手に持ったとてつもなく大きなハンマー。……いつきちゃんだ。

「もう来たただか」

「……………！」

今にも舌打ちをしそうな表情の政宗。

「っ！まだ、ほんのガキじゃねえか……………！」

顔を歪め、絞り出す様に言うこじゅさん。

「こんな小さい娘が、こんなことを……」

悲しそうな顔で呟く成実さん。

そして、私も。いつきちゃんが、凄く切羽詰まったような、なにとともに静かな表情かおをしていたから。多分あれば、覚悟を決めた表情なんだと思う。

「子供だからって甘く見たら痛い目見るべ」

そう言って、いつきちゃんは大きなハンマーを振り上げた。

「なにが戦だ！なにが侍だ！オラ達の大事な田んぼ踏み荒らしてッ！みんな、行くだよ！」

「「うおおおおおお！……」」

その一声で、農民さん達が一斉に飛びかかってくる。

「チッ！」

「政宗様！」

政宗が降り下ろされた鍬くわを受け止めた。その背中を切りつけようとした人を、こじゅさんが沈める。

「梵！！」

「OK！小十郎！！」

「はっ！」

政宗が相手にしていた人を成実さんが引き受け、こじゅさんが周り

を囲んでいた人を威嚇する。その隙に、政宗はいつきちゃんの所へと向かった。

三人は阿吽の呼吸で動いてるけど、私にはなにが何やらさっぱりだ。むう、流石の連携プレイ。

「咲夜！しゃがめ！」

「へ！？」

感心してる場合じゃなかったよ！！

こじゅさんに言われるまま反射的にしゃがむと、頭の上を何かがヒュツと掠めていく。

うわぁ、今の一瞬で冷や汗が……。

「……………」

「大丈夫か！？」

「は、い……。なん、とか」

ギギギツと音が出そうな感じで振り返る。ちょうどこじゅさんが、鍬を持った農民さんの鳩尾に拳を叩き込んだところだった。

「ありがとうございます……」

「ああ。俺から離れるんじゃないぞ」

「はい！……あ！政宗といつきちゃんは！？」

「あそこだ」

こじゅさんの視線の先を見ると、いつきちゃんと政宗が武器を交えていた。

なにか会話してるみたいだけど、何を言っているかは聞き取れない。

「いつきちゃん……政宗……」

政宗がいつきちゃんを怪我させない事は解ってる。けど……。

「大丈夫かな……」

「政宗様ならば、大丈夫だ。……悪い、しばらく暴れるなよ」

「へ……ひゃわあっ!？」

一瞬体が中に浮く感じがして、気がつけばこじゅさんに抱えあげられていました。しかも片腕で。

……すごっ！腕力半端ない！

え？だって私、それなりに体重あるよ!？……今はもう少しあるかも知れない。だってこっちの食べ物美味しい……。ってそれよりも！

「こじゅさん!？」

「苦しくないか？」

「大丈夫です。……ってそうじゃなくて！降ろしてくださいっ」

俵みたいに担がれているけど、苦しくはない。降ろしてほしいのは、そうじゃなくて……。

「恥ずかしいです！私重いし!」

「どこがだ？身長にしたら軽い位だろう」

「こっち来て太ったんですよ……！だから降ろしてください!」

そしてこんな会話しながらも、こじゅさんは動いているんですよ。しかも結構激しく。

酔いそうで怖い……。さらに、どこかに向かって移動しているようです。

「自分で歩きますから!」

「すぐに降ろしてやるから。しっかり掴まってる」

そう言われて、ポンポンと背中を叩かれる。完全に子供とか動物扱いだ、コレ。

年、政宗と二つ位しか違わないんだけどなあ……。なんて思わず脱力していたら、こじゆさんと呼ぶ声が。

「小十郎様！」

「咲夜、コイツ等と一緒にいる。お前等、咲夜に傷をつけさせるなよ」

「了解ッス！」

ストーン、と地面に降ろされて、頭を一撫でされた。政宗の方へ向かうこじゆさんを見送りながら、ため息を吐く。

……。完全足手纏いになってる……。

「咲夜様？どうしたんスカ？」

「いや……。迷惑かけちゃってるなあ。と思つて……」

「そんなことないッス！」

「そうそう。咲夜様が来てから、筆頭も小十郎様も楽しそうだし」

「最近、機嫌いいよな」

私のお守りを任された兵士さんたちが励ましてくれる。最後らへん雑談になつてる気もしますが。

あれ？そういえばこの三人、どこかで見たことあるような……？

「咲夜様は甲斐からの客人なんスよね？」

「はい。あ、あと“咲夜様”なんて呼ばないで下さいよ！私なんて、ただの笛師ですから」

「じゃあ咲夜さん。いつ頃甲斐へ戻っちゃうんスカ？」

……いつだろう。

そういえば忘れかけてたけど、いつになれば私は甲斐へ戻れるのでしょうか？

『なんとかなる！』と思っていたけど、なんとかなりそうにないですよね？

「咲夜さん？」

「へっ？ああすいません。いつでしょうかね……。政宗達と幸村達の状況によつてなので。……はあ」

自分から動こうにも、下手したら二国間の戦い……。うん、それは遠慮したい。全力で。

そもそも幸村達は私が奥州に居ることを知ってるのかなあ？

「はあ……」

元凶である政宗を見ると、ちょうどいつきちゃんを弾き飛ばしたところだった。

一歩、地面から起き上がろうとするいつきちゃんに政宗が踏み出す。

その政宗の顔には、表情が浮かんでいなかった……。

第二十七話

扱い（後書き）

なんだか、奥州編がやけに長い気がします。……番外編でも良さそうな話を本編に入れてるからね。はい。

次回は政宗目線からstart。そろそろいつきちゃんのターンも終わる……はず。今後ともよろしくお願いします。

ありがとうございました。

第二十八話

侍なんて（前書き）

今更ですが、最北端一揆の話は 霜月かいり さんの漫画を参考に
させていただきました。

第二十八話

侍なんて

side 政宗

最北端で起こった、圧政に堪えかねての一揆。

それを制圧に来てみれば、その一揆を率いていたのはまだ十歳やそこらのガキで。

「何が戦だ！何が侍だ！」

その顔に浮かぶ覚悟や憎しみは、本物だった。

「みんな、いくだよ！！」

「「「うおおおお！！」」」

飛びかかってきた農民の相手を小十郎と成実に任せて、俺はいつきの前へ向かう。

「とりゃあッ！！」

「……………」

降り下ろされた巨大なhammerを受け止める。いつきは、まっすぐに俺を睨み付けていた。

「お前。侍が嫌いか？」

「当たり前だべ！侍は、おらたちの田んぼを踏み荒らす。平気でおらたち農民を殺す！」

「……………」

「自分じゃ米も作れねえ癖に！一体何様のつもりだべ！侍なんか、

大ッ嫌いだ!!」

叫んだいつきが、ぐつと力を込めた。
ミシッ、とお互いの武器が音を立てる。

「誰も助けてなんてくれねえ。それならおら達がやるしかねえべ!」
「？」

「ああ確かにそうだ。けどな……!!」

腕に力を込めて一步踏み込むと、その勢いのまま、いつきを弾き飛ばした。思ったよりも吹き飛んでしまった体は、地面に叩きつけられる。

「ッう……ぐう……」

苦しげに呻きながらも、いつきは立ち上がろうと土を掻いた。
取り落としたhammerを拾おうと腕を伸ばしている。

その腕を阻むように、俺はhammerの前に立ちはだかった。

「……!!……う、してっ」

「……」

「どうして、そうやっておら達をいじめるだ……? おら達、なんも悪いことしてねえのに。田の神様も守ってくれねえだ……」

いつきはペタンと地面に座り込み、俯いて呟く。その足元に、円形のシミがいくつもできた。

「いくら農民でも、武器持ちちまえば殺されて当然なんだよ」
「政宗……?」

駆け寄ってきた咲夜が、そつと声をかけてくる。一瞬だけそちらに視線を向け、俺はいつきへ手を伸ばした。

side 咲夜

いつきちゃんに近付いていく政宗。その顔がすごく無表情で、思わず駆け寄る。

「いくら農民でも、武器持ちまえば殺されて当然なんだよ」

「政宗……？」恐る恐る声をかけると、一瞬だけこっちに視線を向けて政宗はいつきちゃんに手を伸ばした。

「……………っ!？」

ビクッといつきちゃんが身をすくませる。それに構わず、政宗はいつきちゃんの頭に手をのせた。

「大事なモン守るために腹あ括ったんだろ？だつたらメソメソするんじゃない」

そう言つて政宗は、いつきちゃんの頭をわしゃわしゃとかき回す。

「だつて……だつて……。いつでも戦、戦で……田は荒れる一方で……。助けてくれるひとなんて……っ!なら、おら達がやるしか……」

「確かにそうだ。けどな、汚れた手で米を作れんのか？」

しゃくりあげながら訴えるいつきちゃんの頭を、あやすように撫でながら政宗は問う。

「それは……」

「出来ねえだろ？」

コクツといつきちゃんが頷く。それを見て政宗は二カツと笑った。

「戦なんてな、この俺が終わらせてやるよ。お前らが、笑って米を作れるような……平和な国を、俺が作ってやる」

いつきちゃんと目線を合わせて、言い聞かせるように話す政宗はすごく頼もしく見える。私と二つしか歳違わないのに！
幸村にも思ったことだけど……世界が違うだけで、こんなにも精神年齢に違いが出るんですね……。

「だから、お前らは武器なんて持つなよ。な？」

「嘘言うでねえ。お侍なんて、おら達のことなんとも思ってたねえくせに……っ」

「そんなことないよ？ 政宗はいつきちゃん達のこと、すごく大事に思ってる」

いつきちゃんは侍不信になっちゃってるみたい。それだけ、沢山辛い目にあわされてきたんだよね。
でも……。

「侍にもいい人は沢山いるよ」

「そうだぜ！ 少なくとも筆頭は嘘なんて吐かねえ！」

「そうそうっ！ 天下なんて、筆頭がサクツと取ってくれるぞ！！」

「筆頭はバカ強えからな！」

私の子守りをしていていた三人が、援護射撃をしてくれる。

「……本当だか？本当に笑って米を作れるような国にしてくれるだか？」

「Of course！約束するぜ？」

不敵に笑って言い切った政宗を見て、いつきちゃんはごしごしと涙を拭った。

「分かっただ……おら、お侍さんのこと信じるだよ。けど、約束絶対に守ってくれ！」

「ああ。任せろ」

そう言って、政宗はまたわしゃわしゃといつきちゃんの頭をかき回した。

あーあー……いつきちゃんの髪ぐしゃぐしゃ。

「Hey guys！村の奴ら起こして来てやれ！怪我人の手当てもな！」

「了解ッス！筆頭！！」

政宗の一声で、伊達軍の人達が一斉に散らばっていく。
そんな中いつきちゃんは……ポカンとしていた。

第二十八話

侍なんて（後書き）

お疲れさまでした！

大分長くなってしまいました……。

しかもまだいつきちゃんのとーん続きます。ですが、これからもうぞよしなにm（・・）m

ありがとうございました。

第二十九話

照れ隠し

どうも、咲夜です。

私はいま、いつきちゃんの村を散策中です。政宗とこじゅさんはいつきちゃんと今後のことについて話し合い。成実さんは後片付けをする村の人達を手伝っています。

「平和だなー」

さっきまでの喧騒が嘘のよう。

時間の流れが緩やかに感じます。

この村に着いてから、ずっとハラハラしていたせいもあるのかも。

「心臓に悪かった……」

寿命縮みましたね。多分。

なんて独り言を言ってるのもそろそろ飽きてきたし……。

「成実さんの所に行こうかな？」

気がつけば村の外れの方まで来ちゃってるし。

そう思っただけを返した瞬間。

……誰かに肩を捕まれたっ？！

周りには誰もいなかったはずだよ！？

なのに……！！

「わああっ……ムグッ!？」

「静かにしろ！私だ!」

悲鳴を上げかけた口を、バフツと塞がれた。聞き覚えのある声と共

にクルツと体を反転させられる。

「あ……え!？」

「お前、伊達に捕らえられていた訳じゃないのか!？」

目に飛び込んで来たのは、抜群のスタイルに色々際どい服、そして金色の髪。

「か……かすが!？」

「だから静かにしろ!」

「あ……ごめん」

とりあえず近くの茂みに二人して隠れる。

「どうしてかすがが奥州に？」

「お前を助けに来たに決まってるだろう!」「そうなの!？……あれ?どうしてかすが?」

私は一応武田の人間……でしたよね?

普通、佐助じゃない?そうじゃなくて真田十勇士の誰かとか。確かに武田と上杉は同盟組んでるけど。

も、もしかして……。

「ねえかすが……。もしかしてさ。もしかしてだよ?……お館様や幸村や佐助、怒ってる?」

あり得る!!

門限破ったどころか無断外泊だし!連絡一度もしてないし!

「……は？」

「どうしよう！？帰ったらお説教かなあ……」

「……とりあえず落ち着け」

怒っている幸村たちを勝手に想像して凹んでたら、さすがに呆れたような顔をされた。

「お前なあ……。独眼竜に拐われたんだろう？」

「あ、それはそうなんだけど……」

拐われてからの事を色々説明。かくかくしかじか。

「つまり、自由だったんだな？」

「うん」

「なら連絡の一つでもしろ！謙信様はお前の身をとて案じていたんだぞ！私だって……」

う……。ごめんなさい。でもさ、連絡手段が分かんなかったんだよ！仕方ないじゃん……。

「まったく！……まあいい。帰るぞ、咲夜」

「ちょ、ちょっと待って！今ヘタに帰って、戦になったりしないの！？」

怪訝な顔をしているかすがに、さらに色々説明。主には成実さんやこじゅさんからの入れ知恵。

「……と言っわけなんだけど」

「戦にならないとは言い切れないな。お前を拐ったことは十分な理由になる」

やっぱりそうなんですか……。

「真田たちが戦を起こさないとしても……。お前を連れ帰れば伊達
が乗り込んでくる可能性もある」

さすがにそこまではしないんじゃない？

私を拉致したのは、多分政宗の気まぐれだろうし。

「とりあえず、戦が起こるのは嫌なんだ。だからさ、そうならない
ように何とかして下さい。ってお館様たちに伝えて？」

「……お前な」

「甘い考えなのはわかってる。でもさ、嫌なものは嫌」

キツパリ言い切って、しっかりとさすがと目線を会わせる。
しばらく無言で睨みあって……

「はあ……もう勝手にしろ」

「さすが……？」

「真田たちには伝えておいてやる！」

さすがが折れてくれた。

分かってくれたのが嬉しくて、さすがの手をギュツと握る。

「さすが……！ありがとうっ……！」

「べっ、別にお前のためじゃない！万が一伊達が甲斐へ攻め込んだ
ら、謙信様が巻き込まれるからッ……」

ツンデレ発動したさすがは、プイツと顔を背けてしまった。けど、
その顔は若干赤い。

年上だけど……可愛い。うん。

「でもありがとうね！」

「……う。わ、私はもう行く！」

「そっか。幸村たちによろしくね！」

「またな。……さつさと戻って来いよ」

「うん。ごめんね」

パタパタと手を振ると、かすかはあっという間にいなくなってしまった。

「行っちゃった。……私も戻る」

がさがさと茂みから出て、村の中心に向かう。

あゝ！葉っぱまみれ……。

「背中どうしょ。自分じゃ取れない……」

葉っぱを払いつつ歩いていたら、後ろで足音が聞こえた。

トントン、と肩をたたかれる。

かすがが戻ってきたのかな？

「なに……むぐっ！？」

振り返ろうとした瞬間、口と鼻を布のような物で塞がれた。
薬みたいな匂いがする。

なん、で……？ねむ、い……。

私の意識はそこで途切れた……。

第二十九話

照れ隠し（後書き）

最後のあれは伏線の回収です。

『こんなのあったっけ？』

となった方は、二十五・五話をお読み返し下さいm（―）（―）m

ありがとうございました。

第三十話　力の片鱗（前書き）

今回はいつになく長話です。
時間のあるときにお読みになる事をお勧め。

第三十話 力の片鱗

side 政宗

一揆の制圧から半刻（約一時間）ほど。

いつきの家でこの村の今後について話し合っていた。

大まかなことはほとんどまとまり、一息ついていたときのことだ。

「あの……ちょっといいだか？」

「吾作どん！どうしたんだ？」

「これが外に落ちてたで、お侍さんたちの物じゃねえかと思って持ってきただよ」

「Ah？見せてみる。……っ！？」

「それは……咲夜の笛じゃねえか！」

……咲夜がこの笛を手放す筈がねえ。

武田のオッサンに貰った笛だと、肌身離さず持ち歩いていた。

咲夜に、何かあったのか？

「コレと一緒に置いてあっただよ」

「文だべか？」

「小十郎、なんて書いてある」

まさか咲夜を狙ってくる奴がいるとは思っていなかった。そのせいで、護衛の忍を付けていない。

妙な焦りに冷や汗がにじむ。

「この文の送り主が咲夜を拐かしたようです。返してほしくば取引をしと。場所は……」

小十郎の言葉が終わるか終わらないかの内に、俺は部屋を飛び出した。
普段なら飛んでくる小言はない。

「Shit!」

悪態を吐きつつ、指定された場所へ繋がれたままだった馬を走らせた。

side 咲夜

ざああああ。ざああああ。

うるさいくらいに、風の音が聞こえる。

その中に混じって、男の人たちの話し声も。

重い瞼を無理矢理持ち上げると、風の音は聞こえなくなり、反対に話し声はつきりと聞こえるようになる。

目に入ってきたのは、空と木と草。つまり屋外の景色。

「どこ、どこ？」

立ち上がろうとして、気がつく。

……なんか、縛られてるんですけど!?

うん。冷静になろう。記憶をリピートして考えてみよう。

散歩してて、かすがに会って、いろいろ聞いて、別れて……。

歩いてたら肩を叩かれて、振り返ったら……。薬みたいなのを嗅がされたんだ。

これって、誘拐?

「よお。目は醒めたか？」

「ひあつ！？」

いきなりすぐ近くで声をかけられて、心臓が飛び跳ねる。

何とか首を動かして振り返ると、ずる賢そうな顔したおにーさんがいた。

人を見かけで判断しちゃいけないとは思うけど、悪役っぽい。このおにーさん。

と、それは置いて。ひとまず情報収集せねば。

「あの一、何が目的ですか？」

「仲間を返してもらおうと思ってな。オマエはそのための人質だ」

話してくれたことを聞く限りだと、このおにーさんたち。弥助くん兄弟の村で政宗が捕まえた盗賊一味の残党らしい。

ここまでベラベラ教えてくれる理由は……聞かないでおこう。「冥土の土産だ」とか言われそう。

「おい！そろそろか？」

「はい。お……噂をすりゃあ。来ましたよ頭領」

見張りのひとが目を向けた方をみると、馬に乗った政宗が駆け込んできた。そして、少し遅れてこじゅさんも。

「咲夜！」

「おっと。伊達殿、それ以上近づかないで頂きたい」

その言葉と共に、頬に冷たい物を押し当てられた。微かに金属のにおいがする。

ああ……前もこんな状況あったっけ。

そんな風に現実逃避をしている間にも、頭の上で緊張したやりとりは続けられている。でも、コレばかりは私が『助けて』とはちょっと。

私の命or民の安全。迫られているのはこの二択。

そして、領主――まさむね が選ぶべきなのは後者。けど『自分は良いから』なんて私は言えない。死にたくないから。

「どうしても、要求を飲んで頂けないのでしたら、彼の命を戴くだけです」

「痛ッ……！」

「っ！」

「デメエ……っ」

首筋に鋭い痛みが走り、次いで生温かいものが首筋から下へと伝っていく感触。

嘘、でしょ？だってここはっ！

……ううん、違う。

ここは『BASARAの世界』じゃない。『現実』だ。

ついこの間、そう実感したばかりだったはず。

私もいい加減、腹を括った方がいいのかもしれない。

そう思ったときに思い出したのは、夢の中で聞いた言葉。

「月読の力はお前の望む形になり、受け継がれる」

そんな力が、本当にあるのならば。

もしもその力を受け継ぐのが、私なのだとしたら。

（いまっ！今使えなくてどうするんだーッ！！！）

いくら何でも、こんなピンチの時に夢の内容を思い出すなんて現実

逃避も良いところ。
けれど、

ビュオオツ！！

唐突に強い風が吹き、「男たちを吹き飛ばして切り裂いていった」。
それは事実。

その隙に政宗が駆け寄ってきて、縛られていた縄を切ってくれる。
盗賊残党の方々は、こじゅさんにあつという間に縛りあげられていた。

「政宗様。コイツら、どういたしますか」

「とりあえず、縛って見張らしておけ。それよりも咲夜、お前、婆沙羅者だったのか？」

「…………へ？」

…………でも、今の風は確かに不自然だった。

そもそも普通の風は人を切り裂けません！そうだったら外を安易に歩けないし！

でも、あの場にいたのは私と伊達主従。それにおにーさんとその仲間たち。

状況から考えると、消去法であの風を起こしたのは…………私！？

「いやっ！違う違う違う！婆沙羅の力なんて持ってないし！ありえない！絶対違う！」

「落ち着け、咲夜。政宗様、その話は後にいたしましょう。先に咲夜の首を」

こじゅさんの言葉で思い出す。そういえば、首を軽く切られたような。

触つてみたらまだ血が止まりきっていなくて、首に包帯をぐるぐる巻きにされました。

これは……しばらくの間痛いだろうなあ。

「咲夜ちゃんッ！よかったあ……」

「姉えちゃん！よかった、無事だったんだべなっ！」

村に戻ると、成実さんといつきちゃんが出迎えてくれました。うう、心配をかけてしまつて本当に申し訳ない。

「二人とも、心配をかけちゃつて……ん？」

「What?どうした、咲夜」

「いつきちゃん、いま【姉えちゃん】つて……」

「……成実、教えたのか？」

「え？俺？言つてない！」

成実さんがブンブンと首を横に振り、次に目を向けられたこじゆさんも小さく首を振つて否定。

もちろん私は教えていないし、政宗も違う様子。じゃあ何故に！？

「だつて姉えちゃん、どつからどう見ても女の人だべ？」

「え？」

「そんな風に男物の服着てても、すぐ分かるだ。気付かない人なんていねえべ？」

……どうしよう、地味にうれしい！男に間違えられるの、しょつちゆうだったからなあ。

チラッと政宗たちの様子をうかがうと、三人とも複雑な顔をしていた。

自分たちが気づいてなかったことを、一般人の女の子に『間違える人なんていない』って断言されちゃったしね。
いろんな意味で、いつきちゃん。恐ろしい子っ。

第三十話 力の片鱗（後書き）

久方ぶりの投稿、申し訳ないです。

PC復活しました！更新ペース元に戻せればいいなあ。

次回で奥州編は終了の予定。やっと瀬戸内コンビが出てきます！

その前にもう一人、オリキャラが登場しますが……。

お付き合い頂ければ幸いです。

ありがとうございました。

第三十・五話 予感

信州、上田城。

この城に、真田幸村、武田信玄、上杉謙信の三人が集っていた。伊達に潜入したかすがの報告を聞いた三人は、それぞれが別の表情で座っている。

「咲夜殿……」

「むう……なるほどのう」

「ふふ。かのじょらしいですね」

穏やかに笑う謙信、感心したような信玄、怒っているような、困ったような顔の幸村。その幸村の後ろでは、佐助が眉間にしわを寄せている。

「戦が嫌、か。それをはつきり口に出すとは、やはり、感覚が違うのだな」

「ええ。だからこそ、どくがんにゅうもかのじょにきょうみをもったのでしょ」

「まったく。……幸村！すぐに遠出の支度をせい！伊達の小童と話を付け、咲夜を連れ帰れい！」

「了解いたしましたうお館様あつ！佐助えつ、お前も準備をせよ！出来次第出立だ！」

「承知した。……旦那、落ち着いてけよ」

信玄の一声に真田主従がすぐさま行動に移る。

部屋から飛び出していく幸村と、音もなく姿を消す佐助を見送り、謙信も己の忍に声をかける。

「つるぎ、おまえもしゅういのくにぐにの　じょうほうをあつめてきてくれませんか。あのこのことが　ほかのくににひろまってしまっているやもしれません」

「はい！謙信様っ！」

「けがをしてきてはいけませんよ。おきをつけなさい」

「ああっ！謙信様っ、なんてお優しいお言葉！」

ひとしきり花を周囲に咲かせ、かすがも任務へと向かった。

二人きりになった室内で、甲斐の虎と越後の軍神は穏やかに言葉を交わす。

「かいのとら、さくやのことを、どうおもっていますか」

「……娘、じゃな。そこまでの接点があったわけではないが、なぜか、な」

「ふふ、なるほど」

「もし咲夜が、元の世界へ帰れなかったならば。そのときは儂の養女にしようかとも考えておる」

「おや、それではわかたらが　きおくれしてしまうのでは？えんだんをもちかけたことが　あるとききましたが」

「うむ。嫁を取らせるならば、咲夜のようなおなごが良いと思っておるが……。幸村はまだまだ未熟よ。咲夜はやれんな」

至極まじめな顔で言い切った信玄に、まだあなたのむすめではありませんよ。と謙信が苦笑する。

「そう言うお前は。咲夜をかなり気にかけているようじゃが？」

「ええ。あのこのことは　わたくしもむすめやいもうとのようにおもっていますよ。あのこには、ひとをひきつける『なにか』がある」

「そうじゃな。咲夜が来てから、幸村も佐助も雰囲気が柔らくな

った」

「けれど……あのこは、わたくしたちが　そうぞうもつかないような　さだめをせおっているのでしょうか」

「さだめ運命？　どうということだ」

先ほどまでとは一転、シリアスな空気が漂いだした部屋。眉間にしわを寄せた信玄の問いに、謙信はゆるゆると首を振るだけ。

「はつきりとしたことは、わたくしもわかりません。けれど、そのようなよかんがするのです」

「そうか……。では、咲夜がこちらにいる間、儂らが気にかけてやれば良からうて。そのためには、幸村たちには咲夜を連れ帰ってもらわねばな」

「ええ。そうですね」

「うお館様あー!!」

「おお、幸村！」

「準備が整いましたぞ！」

「そうか！　では幸村あつ、咲夜を連れ帰って参れえっ！」

「承知！　この幸村、果たして見せましようぞーっ！！！」

そして、幸村と佐助は一路、奥州へ……

第三十・五話 予感（後書き）

……謙信さまの台詞、a 1 1 平仮名は読みにくいでしょうか？少しぐらい漢字も混ぜるべきか……。

えっと、ウチの信玄公と謙信公に格好良さを求めないでくださいませ。

信玄公に至ってはただの親バカになってしまった……。

親じゃないのに。ありがとございました。

番外編 明けておめでとございます（前書き）

*** 注意 ***

この番外編には作者が登場しています。そう言ったものが許せない＆嫌いな方はスルーしてください。

本編とは一切関係の無い話なので読まなくても大丈夫です。

番外編 明けましておめでとございます

いつも通りの平和な朝。夜明けとともに人々が起きだす。そんな中、普段と異なるところが少々。その異変は様々なところで発生していた・・・。

お正月も近くなり、浮き足立った雰囲気のある日の朝。

幸「佐助、これは何なのだ」

佐「…俺様が聞きたいくらいなんだけど」

明るい朝日が差し込む部屋の中。深刻な顔で幸村と佐助が向かい合っていた。

そんな二人の頭の上には長い、ウサギの耳。ちなみに色は髪色に近くなっています。

幸「兎の耳…であろうか」

佐「どう見ても兎の耳だね…」

頭の動きに合わせてフヨフヨと動く兎の耳は普通なら、まああり得ない。

そして、二人ともそのあり得ない展開に頭が付いていかないらしい。

「~~~~~!・・・っ!」

「~~~~~! ああっ! 咲夜様!？」

にわかに廊下が騒がしくなり、バタバタと足音が聞こえた。その後、スパーツと襖が勢い良く開かれた。

咲「…！ああ、遅かった…っ！」

幸「咲夜殿！」

佐「咲夜ちゃんも！？」

開け放たれた襖の向こうで脱力した風な咲夜の頭には、グレーのうさ耳がゆれていた。

咲「やっぱり二人も耳が…この調子だと他のみんなも…」

ブツブツとつぶやく咲夜の手には、何か紙のような物が握られていた。

それに気がついた幸村が声をかける。

幸「咲夜殿、それは？」

咲「コレ？置き手紙…。どうもこの耳、桜耀さんが原因らしくて…。

」

幸＆佐「「アンタ（貴殿）の仕業か…！」」

あ、バレた。もう、バラすなよ咲夜」。

咲「そう言われても…」

幸「今すぐ元に戻して下され！」

佐「こんなじゃ外も歩けないんだけど！？」

怒るな怒るな。そうなってるのは君らだけじゃないし。

ホレ。（ポンっ！）

「うわっ！」

「痛っ！」

「What !?」

「!?」

「.....」

ポンつというマヌケな音がした。と同時にさっきまで何もなかった幸村たちと咲夜の間の空間にドサーーーツと人間が落ちてくる。

幸「政宗殿!? 片倉殿!?」

咲「元親に元就、慶次まで!?!」

佐「て、言つか旦那方も...」

そう。落ちてきた政宗達の頭にも、一人を除いてしっかりとうさ耳が生えていた。

な、ほら。言ったつしょ? そうなってるのは幸村達だけじゃ無いって。

幸&佐「「そういう問題ではありませぬ(じゃない)!!」」

政「つーか、どうして小十郎は無事なんだ?」

佐「ホントだ... 右目の旦那はうさ耳無い...」

う　っ..... それには複雑な理由が..... っ。

親「どんな理由だよ...」

そ、それは.....

咲「こじゅさんにうさ耳ついてる姿を桜耀さんが想像出来なかったんだよ」

！咲夜っ！バラすなって言ったのに..... っ！

親「なんだそりゃ」

慶「いい加減だなー」

政「H A ツ　！アイツのやりそうな事じゃねえか」

・・・酷いなあ、容赦つてものを知らないのか？

佐「アンタって計画性無いよね…」

幸「そうでござる」

小「……………」

就「全く…この様なことで我らが本編に出るのはいつになるのだ…」

それは問題ない！話の大まかな筋は出来てるし！近いうちに！じきに！…………多分。

全員「…………多分！？」

咲「桜耀さん…」

慶「第一武田んトコの間人しかまだ出てないんじゃ…？」

政「そんなんでも本当にOKなのか？」

こつちにも色々事情があるんだよ！でも、何とかなる！何とかするから！

それよりホラ、せつかく新年の干支のウサギの耳が生えてるんだから皆さんに新年の挨拶をしなさい！新年の挨拶を！

就「逃げたな」

親「ああ、逃げたな」

小「だが、新年の挨拶は必要だろう」

慶「確かに」

政「しょうがねえ。新年のgreetiing位してやるか」

佐「だね」

幸「うむ」

咲「うん」

そうそう。新年の挨拶は大事だからね。じゃあ咲夜。台図を頼んだ。

咲「了解です。じゃあ行くよ。せーのっ」

全員＆桜耀「……」明けましておめでとっございます。今年もよろしく願います!!」「」「」

親＆政＆慶（で、この耳はいつになったら戻るんだ？）

桜（さあ？）

咲（ええ!?!）

桜（そのうち戻るよ。…きつと）

番外編 明けましておめでとつございます（後書き）

と、言う訳で

明けましておめでとつございますー！

どうか今年も“夜に咲く”と桜耀をよろしく願っています。

2011年 元旦

夜に咲く・桜耀

番外編 こどもの日？（前書き）

アンケートの結果ですが・・・

全く票が入りませんでした（；ーー）

わずかに入った票も綺麗にばらけまして。

もう流れで行く事にしました。ただし、アンケートで票が入ったキ
ヤラの出番は“気持ち”増やしたいと思います。気持ちだけです
が・・・。

番外編 二つ目の日？

とある皐月の日のこと。

上田城の自室で、目覚めたばかりの咲夜はパニックになっていた。

（何これ！？なんで？どうなってるの！？）

「どーしてこどもになってるの？？」

そう。咲夜は今、三、四歳ほどの子供の姿になっていた。

自分で軽く手の甲を抓ってみると・・・十分痛い。

（夢じゃない・・・）

その後、「普段の時間に起きてこないから」と、様子を見に来た佐助によって子供化した咲夜は発見された。

そして数時間後・・・。

「幼い頃の咲夜殿、とても可愛らしいでござる！」

「ちよっ！旦那！独り占めは無しっしょ！？」

「ゆきむら、さすけ。はずかしいよお／＼／」

なぜか咲夜は幸村と佐助に愛でられていた。

ちなみに咲夜が今いるのは幸村の膝の上。

普段なら、絶対にあり得ない構図である。

「幸村様！！」

まったくとした空気が流れている部屋の中に、一人の兵が駆け込んできた。どうも、かなり慌てているようだ。

「大変です！独眼竜が……」

「Hey!じゃまするぜ、真田幸村!」

兵の言葉が終わらぬうちに政宗が姿を現した。その後ろには小十郎の姿も見える。

「まさむね！じゅさん！」

「なぜ上田に……」

「An? 咲夜が子供になっただって聞いてな。見に来た」

「そんなこと、誰に聞いたわけ？」

「」の*authorにな」*作者

もっともな佐助の疑問に返された政宗の答えは、案の定というかなんというか……。

「また貴殿の仕業か!!」

•
•
•
○
•
•
•
○
•
•
•
○
•
•
•
○

「あれ？」

フワッ。
シュタッ。

なんの反応もないことに驚いたような声を上げる咲夜。

そんな咲夜の前に風が吹いたかと思うと、急に一つの影が現れた。

「こたあ！」

「風魔！？何でお前が……」

そういいかけた政宗に、小太郎が何かを差し出す。

それはみたところ、なんの変哲もない手紙。

しかし、差出人の所にはしっかりと「作者より」と書いてある。

「・・・読めってことか？」

「・・・（コクリ）」

一応小太郎に確認をとり、政宗はガサガサと手紙を開いた。

「どれどれ・・・」どうも、物語上でお会いするのは二度目まして。作者こと、桜耀です。と、まあ挨拶は程々にして。幸村、佐助、あんまり怒らないでよ。さっきまで子供咲夜をあれだけ可愛がってたんだから！」

「う・・・」

「む・・・」

「おーよあさん、もとにもどして！」

手紙の内容を聞き、言葉に詰まる幸村と佐助の横から咲夜が回らない舌で必死に訴える。

「その辺りのことも書いてあるな、続き読むぜ？」「ごめん咲夜、それは無理。まあ、そのうち戻るから頑張つて？」

「そんなぁ・・・」

「・・・それ以前に、なぜ手紙相手に会話が・・・？」

様々な周囲の反応はひとまず置いておき、政宗はサクサクと手紙を読み進める。

「小十郎、細かいことは気にしない。あ、そうそう。今回はこれ以上話に干渉するつもりはないから。みんな、咲夜のこと頼んだよ

「？じゃあね〜」・・・だと」

「それで終わりでござるか？」

「ああ、letterはこれで終わってるな」

「風魔はほかに何か預かってきてないの？」

「・・・（コクリ）」

「ふん・・・合いも変わらず無能な作者よ」

「おいおい、それは言い過ぎだぜ」

・・・あれ？さっきまでこの部屋にいなかった人たちが・・・。

「もとなり！？もとちか！？」

「咲夜、久しいな」

「お二人ともなぜここに！？」

「ん？作者に咲夜のことを聞いてな！」

そんなこんなで多くの客人が集まった上田城では、その日の夜宴を開くことになったのだった。

宴はかなり盛り上がり、幸村、政宗、元親が飲み比べを始めていた。それを佐助と小十郎が「呑みすぎるな」と諫めていたり。そんな中、一人静かに酒を飲んでいる元就の横で、咲夜はこっそりこつくりと船をこいでいた。

「ん・・・むー・・・」

「咲夜。眠いのならば・・・」

「んー・・・。だい・・・じょーぶ」

そう言いながらも、かなり眠かったのだろう。それから大して経たないうちに、咲夜は元就にもたれ掛かって眠ってしまった。

「すう……すう……」

「……猿飛」

「なに？毛利の旦那……って、咲夜ちゃん寝ちゃったか」

佐助は咲夜の姿を見て、軽く苦笑いすると立ち上がる。

「毛利の旦那、ちょっと咲夜ちゃん頼める？俺様、布団敷いてきちゃうから」

「けどよお。一人で寝かせといて大丈夫か？」

「*No doubt・夜中に起きたりするかもしれねえしな」*
確かに

いつの間にか近くに来ていた元親の言葉に、政宗が同意する。

「ならば、この部屋に布団を敷けば良い。どうせ貴様等は朝まで飲み明かすのだろう？」

「なるほど！そうすれば、誰か誰か咲夜殿の側にいれまするな！」

そんなわけで、佐助と小十郎が布団を敷き始めた。

その横で咲夜は相変わらず、すうすうと寝息を立てている。その咲夜を元親が布団に移すことになった。

「元親殿！慎重に！」

「起こすでないぞ。長曾我部」

「あ、ああ」

「*Not so loud・お前等の声で起きちまうだろ？」*
静かに

「ん……んう。う……ん」

そう言ってる側から咲夜がぐずりだす。
アワアワとそれぞれがあやそうとするが、明らかに手つきが馴れていない。

「旦那たち、馴れてない感じがものすごいね・・・」

「仕方ねえだろう」

「んなこと言ってねえで、なんとかしろ！」

「だって。右目の旦那」

「・・・ったく」

小十郎は、「やれやれ」といった感じで咲夜を抱き上げると、手慣れた様子であやしだす。
すると、咲夜はまたすぐにすうすうと眠ってしまった。

「右目の旦那、馴れてるね」

「ああ。昔、政宗様の子守をしていたこともあるからな」

さらりとそう言うと、小十郎は咲夜を布団に寝かせた。
しばらく様子を見ていても、咲夜が起きそうな気配はない。

「完全に寝たようだな」

「おし。じゃあ呑むか!!」

「OK!」

「了解でござる!」

「ふん・・・」

「咲夜ちゃん起こさないように気をつけてよ?」

結局武将たちは明け方まで飲み明かしたようです。

そして、次の日の朝。

目を覚ました咲夜の体は、元に戻ってしまってた。

「よかったあ・・・元に戻ってる」

「・・・・・・・・」

安堵の息を吐く咲夜の前に、昨日の夜いつの間にかいなくなっていた小太郎が姿を見せる。

「小太郎！昨日、どこ行ってたの？」

「・・・・・・・・」

「???」

そのあと、咲夜から少し遅れて目を覚ました武将たち。

元に戻った咲夜の姿を見て、喜びながらも、少し残念そうだったとか。違うとか。

おまけ

上田城で宴が始まった頃。

（おーやっとなるやっとなる）

（・・・・・・・・）

（小太郎！？いつの間に！）

（・・・・・・・・？）

（え？どうして咲夜が子供になったのだった？）

（・・・・・・・・ コクリ）

（そりゃ、今日がこどもの日だから。それ以外に大して理由はないよ？）

（！？）

そんなやりとりが、とある場所でされていたとか。いない

番外編 こどもの日？（後書き）

こどもの日ネタです！！

本当はもつといろいろと書きたかったんですが・・・それを書いて
いると明らかに五月五日に間に合わない！！
で、かなりカットしました。

その結果がこれです。グダグダに・・・カットしたはずなのにかなり
長いし・・・。

あれ？こんな筈じゃあ・・・。

でも、かけなかったネタは本編とかに出せたらいいなあ・・・。

ありがとうございました。

2011年 五

月五日 桜耀

番外編 七夕（前書き）

今回は、これまで以上に長い話になりました。
書いてて止まらなくなってしまうて・・・。
そのため、かなりの乱文です。

この話は本編に一切関係ありません。
読まなくても大丈夫です。

番外編 七夕

七夕二日前。

いつも通りの、穏やかな夜。

月と星の光が、静かに地面へと降り注いでいる。

ぼんやりと夜空を眺めていたら、後ろから急に声をかけられた。

「咲夜殿？」

「咲夜ちゃん、なにやってるの？」

「につ！？・・・びっくりしたあ」

振り返ると、幸村と佐助が咲夜の後ろに立っていた。

まあ、だいぶ長いことここであんまりしてたからなあ。と思いつつ咲夜は答えを返す。

「今日は星が綺麗だったから。天の川がよく見えるよー」

その言葉に、二人とも空を見上げた。満点の星空に、白い河が流れている。

「そういえば、もうじき七夕だっけ」

「おお！そうであつたな！」

「あ、こっちにも七夕ってあるんだ。・・・そうだ！ねえ、七夕パーティーしない？」

突然の咲夜の提案に、二人とも面食らったような顔をしている。

「七夕ばーていー・・・でござるか？」

「うん。みんな呼んでさ、笹飾って願い事書こつよ!」

そんなこんなで、「七夕パーティーin上田」の開催が決定したのであった。

「じゃ、俺様招待状を配ってくるから」

「ごめん!ありがとう佐助!」

「咲夜殿!!!笹を採ってきましたぞ!」

上田城では、パーティーへ向けて咲夜達が忙しく動き回っていた。

「あと必要なものは、筆と、墨と、短冊と……あぁっ!」

「咲夜殿?どうしたのでござるか?」

「何か足りなかった?」

「……折り紙無いじゃん。どうやって飾り付けしよう」

しまった!と呟く咲夜に、不意に声かけられた。

その声は、幸村のものでも佐助のものでもない。

「咲夜ちゃん、お困りかい?」

「え?誰!?」

「え、ヒド……」

「アンタ、何者?どこから入ってきたワケ?」

「ちよっ!さ、佐助サン!」

「なぜ佐助の名を!」

咲夜に声をかけた人物に、佐助が素早くクナイを突き付けた。

声の主は、首筋へ突き付けられた刃に『ひえっ』と情けない悲鳴を

上げる。

「待つて待つて！私だよ！私ですよ！？」

「あぁっ！その声はもしかして…桜耀^{おつよう}さん？」

「そうです！桜耀ことこの作者ですよ！だから佐助、離してください！」

いや、申し訳ありません。つい。

七夕パーティー、楽しそうじゃないですか。ちょっとした息抜きに・
・ですよ。

「現実逃避でござるな」

「現実逃避だね」

「うるさい！…と、そうだ。咲夜ちゃん、はいコレ。お土産」

はい、と咲夜に風呂敷包みを渡す。

ずっしりと重みのあるそれは、中身がいまいちわからない。

「なんですか？これ？」

「穴あけパンチと折り紙セット。あと、そうめんを三十束ほど」

「何故そうめん？」

「七夕の日に女の子がそうめん食べると、縫い物とかが上手になるらしいから。あ、めんつゆも持ってきてあるよ」

そのそうめんは、後でみんなで食べることにして、パーティーの準備を再開する。もちろん、私も手伝いましたよ！

そして、日もすっかり暮れた頃。

あちこちから皆が集まり、上田城はかなりの盛り上がりを見せてい

た。

男衆はすでに宴会を始めてしまっている。酒の肴は、あのそうめん。

「咲夜ちゃんは、もう願い事書いた？」

「まだです。何を書こうか決められなくて……」

「そっか。……どれどれ、他のみんなは何書いたかな」

笹に吊るしてあった短冊の、手近な一枚をしてみる。

お、政宗のだ。

『天下統一』

どれ、こっちは。

『お館様のご上洛』

こりゃ、幸村だね。

他にも色々と見て行ってみるが、みんなそれぞれ【らしい】ものだ。

「性格でるねえ……。お？これ……？」

幸村の字だな。ちなみに三枚目。

みんなして何枚も書いてるようだ。願いは一つしか叶わないって。ついでに言うなら、幸村の二枚目の短冊に書いてあった願い事は

『旨い甘味が食べたい』

だった。

三枚目には何を書いてあるのやら。

「どれどれ。……！ほお……」

『咲夜殿が、ずっと武田にいてくれますように』

それが、幸村の三枚目の短冊に書かれていた願い事だった。

その短冊があつた場所は、ちょうど葉が茂っていてその葉に短冊が隠れてしまう。

良く見るとその場所には、他にも何枚か短冊が吊るしてあつた。

そのどれもが、咲夜に関係するもので。

「良かったよかった。皆に好かれてるじゃない」

チラリと咲夜のほうを見ると、ちょうど願い事を書き終わったよう
だ。

「願い事、なんて書いたんだい？」

「あ、えっと……」

「ちよつと、見せてみ」

咲夜の手から短冊を抜き取って、その内容を見る。

その内容は、とても咲夜らしい。

「良い願い事だね」

「この願い事、叶いますか？」

「さあ。私は作者だけど、皆の事を“記録”してるだけだから。先
がどうなるかは、みんなしだい」

向こうから、みんなの呼ぶ声が聞こえる。

早く行かないと、そうめんが終わってしまいそうだ。

「ヤバ！咲夜ちゃん、行くよ！」

「え、ちよっ！待ってください！！！」

『こんな平和が続きますように』

f i n .

番外編 七夕（後書き）

番外編、七夕のお話です。

この展開は、ちよつと早いかな・・・と思いつつもここで書かないとタイミングを逃しそうだったので。

ま、まあ、あくまで“番外編”ですので!!

ありがとうございました。

番外編 H a p p y H a l l o w e e n ! (前書き)

この話は本編とこれっぽっちも関係ありません。

番外編 Happy Halloween!

いつも通りの朝のこと。

BASAARAの世界に来て、だいぶ早起きになった咲夜が縁側で伸びをする。

「ん~~~~っ！今日も良い天気っ！？……痛ぁ……」

手を下ろした瞬間に、パソコンと良い音がして咲夜の頭に何かが当たった。

若干涙目になりながら、辺りを見回すと落ちていたのはオレンジ色の物体。

「……小さいカボチャ？」

拾い上げて見ると、なにやら穴が開いている。穴は、つり上がった2つの三角形。そして、ギザギザの横に広いもの。

「これ……ジャック・オ・ランタン？どこから降ってきたの！？」

そう、咲夜の頭に落ちてきたのはハロウィンに見る顔の彫られたカボチャ。の両手で包み込めるサイズ。

「……嫌な予感がする」

咲夜がポツリと呟いた、その直後。

ドンッ！！！！

どこからか、鈍い大きな音が聞こえたのだった……。

――
場所は変わって、大広間。

幸村、佐助を始めとした武将の面々が、複雑な表情で集まっていた。先ほどの鈍い音の正体は、武将たちが降ってきた音だったらしい。

「何て言うか……。みんな凄いことに……」

なにしろ、咲夜以外の人間は皆、何かしらの仮装をしているのだから。ちなみに部屋の中にいるのは咲夜、真田主従、伊達主従、瀬戸内コンビ、小太郎の八人。

「こりゃあ一体なんなんだ？」

「ハロウィンって言う海外のお祭り？ だと思う」

「はろういん？」

「そう」

咲夜がハロウィンについての説明をする。かくかくしかじか。

「面妖な祭りだね……」

「良いではないか、佐助。愉快だぞ？」

「なあ咲夜、オレのしてるのはなんの仮装なんだ？」

そう訪ねてきた元親は、頭に大きなネジが刺さっている。顔や腕には縫い合わせたような傷。

「たぶんフランケン・シュタインかな？ 幸村は狼男、佐助はミイラ男で政宗は黒猫。こじゅさんは吸血鬼で小太郎が死神。元就さんは魔じ……じゃなかった。魔法使い」

こうして改めて見ると、物凄く愉快なことになっている。なっているのだが、やけに似合っているので笑えない。

（みんなイケメンだから……。ふざけた格好でも妙に似合っちゃうんだよね……きっと）

しみじみとそんなことを思ってしまう咲夜であった。

「咲夜」

「なに？政宗」

「trick or treat！」

良い発音で手を突きつけてくる政宗の顔には、なにかを企んでいるような笑顔。一言で表すならニヤリだろう。

「えっ？」

「HAッ！菓子がねえならイタズラだな……？」

「ええ！？お菓子なんかあったかな……」

あわててパタパタと懐を探る咲夜。そのまわりでは政宗に非難の声があがるも、政宗は聞こえないふりをしている。

「うーん。……なさそう」

「じゃあ、覚悟しろよ？」

「政宗様！」

ニヤッと、よりいっそう愉^{たの}しそうに政宗が笑み、小十郎が諫^{いさ}める声をあげた。
その直後。

チーンッ！

「……！？」

「なんだ、今の音は」

「電子レンジ……」

どこからか聞こえたマヌケな音に、小太郎が警戒し、元就は冷静に周囲を見回す。思わず呟かれた咲夜の言葉は誰にも聞こえなかったようだ。

「それ……ではないだろうか」

「南瓜……か？」

「あれ！？これって……」

幸村と小十郎の台詞を聞き、ジャック・オ・ランタンに目を向けた咲夜が驚いたような声をあげる。

「キャンディー？」

さっきまで何もなかったハズのランタンの前。そこにちよこんとキャンディーが置いてあった。

「いつの間に……」

「コレ置いたの誰だ？」

元親の問いかけに、全員が首を傾げる。誰にも覚えは無いらしい。

「Ah？誰かいるだろ？」

「俺様気付かなかったなあ……。風魔は？」
「……………（フルフル）」

全員がもう一度首を傾げたその時。
バコンッ！！

そんな音と共に、城内が騒がしくなった。

「何事でござるか！？」

「チッ……敵襲か！？」

「ちよっ！旦那方！そんな格好で出る気！？」

「「あ……………」」

こんな愉快的格好で外に出れば、ナメられること間違いない。
その間にも、騒がしさはどんどん近づいてくる。

「クソッ……………どうする」

「どうするもなにも。迎え打つしかないであろう」

その言葉に頷き、全員が各々の武器を構える。
乱暴に襖が蹴破られ、現れたのは……

「慶次！？」

「よおっ！やってるね！」

「キキッ！」

前田の風来坊とその相方だった。

「なにしに来たんだお前！」

「“桜耀”ってヤツに、兄さんたちが面白いことやってるって聞いてさ」

爽やかに笑った慶次の言葉に、ずるツと皆の力が抜ける。

「A h—……。やっぱりな」

「そんなこつたるうと思つちやいたがよお……」

「ふん……。毎回毎回芸の無い」

呆れたように息を吐く面々を尻目に、夢吉がトテトテツと咲夜の元へ歩み寄る。

「キキツ」

「夢吉、どうしたの？……あ、手紙？」

「お！そうだったそうだった。桜耀さんから預かった手紙だよ。それ」

「へー。どれどれ」

ガサガサと手紙を開き、目を通す。

要約すると

『明日には全部普段通りに戻ってるから、それまで楽しんでね』と書いてあったようだ。

「それと……さっきの音はやっぱりランタンからみたいだよ」

「……？」

「あの南瓜、『trick or treat』って唱えると、お菓子が出てくるようになってるんだって」

そのあと。

試してみたところ、それは本当の事だった。それぞれが面白がってやり過ぎたため、お菓子の山が出来てしまったのはまた別の話。

「旦那あ……太るよー？」

「俺は動くから問題ない」

「crazy……」

「見ているこちらが胸焼けしそうですね……」

「ハハ……。あの体のどこに入ってるんだろっな……」

「しばらく甘いものはいらねえな……」

「見たくもないわ……」

「……（コクリ）」

そのお菓子の山が、数日の内に幸村によって消費されたことも、また別の話。

「動いて消費出来る量じゃないよ……。なのに太らない幸村って……」

幸村がしばらくの間、咲夜から羨みの視線を向けられるようになるのも、さらに別の話。

番外編 H a p p y H a l l o w e e n ! (後書き)

H a p p y H a l l o w e e n ! !

例のごとく長めの話になってしまいました。

かすがとかも出したかったのに o r z

次の番外編はクリスマスにお届け(予定)です。

ありがとうございました。

番外編 ある日の日常。 (前書き)

お話的には第八話の直後です。

タイトル通り、咲夜たちの日常。
お楽しみください。

番外編 ある日の日常。

プチ演奏会？も終わり、幸村、佐助、私の三人で一息入っていたときのこと。

私たちは、幸村が幼い頃の話で盛り上がっていた。きっかけは佐助の言葉。

「その笛ってさ、旦那が昔使ってた奴だよね？」

「う、うむ」

「えっ！そうなの？」

その佐助の言葉になぜか幸村は気まずそうな顔をする。

ついでに、私が言葉に詰まったのは敬語を使いそうになったせい。

「旦那さあ。昔、大将に言われて笛習ってた事があったんだよね」

「そうなんだ」

「性に合わなかったみたいで長続きしなかったけど」

「さっ・・・佐助！」

幸村が慌てて佐助に抗議する。渡しは思わず笛と格闘する幼い幸村を思い浮かべて笑ってしまう。

「ふふふ」

「咲夜！？」

「ご、ごめん。でも、幸村笛吹けるんだね」

「ま、旦那のは『音がでる』よりもちよつとましなだけけど」

佐助の言葉に幸村がう・・・と呻く。

「そう言う佐助はどうなのだ！」

「あー。俺様もそこそこかなあ」

「でも吹けるんだ」

「簡単なのなら何とかね」

そっかあ。ちよつと聞いてみたいな。

「ねえ。今度聞かせて？幸村も佐助も」

「な！？」

「咲夜ちゃん、冗談きついよ？」

「冗談じゃないよ」

その後、しばらく押し問答が続いて・・・

結局笛は聞かせてもらえなかった。

そんな、なんてこと無いある日の日常。

番外編 ある日の日常。 (後書き)

日常、はじめました。

これから増やしていく予定です。

一息つきたいときにどうぞ。

番外編 ある日の日常。二（前書き）

時系列的には十七話の前日です。

番外編 ある日の日常。二

ある日のこと。

私は頼みごとがあつて幸村と佐助を探していました。

「幸村ー？佐助ー？」

「咲夜ちゃん？」

「何でござるか？」

あ、いたいた。

よかった。仕事じゃないみたい。

「あのね。頼みごとがあるんだけど・・・」

「？」

「なに？」

「この世界の常識みたいなのとか、お金の使い方とか、教えて？」

頼みごとって言うのはこれなんです。

あまりにも急な私の言葉に、幸村と佐助がびっくりしたような顔をしているけど。

「まだまだ元の世界へ戻れそうにないから・・・。それなら、城下町とか行きたいなあ、と思つて」

「それならば、某たちが・・・」

「うん。でも、幸村達は忙しいから・・・」

私の都合で仕事の邪魔しちゃっても悪いし。

そういうことを覚えておけば、自分の行きたいときに行けるし。

「あー確かにねえ。俺様も旦那も忙しいから」

「でしょ？それに、私はもうお館様や幸村に使えてる訳だし」

「そのようなこと気にせずとも・・・」

幸村はそういつてくれるけど、そう言うわけにもいかないでしょ。
うん。

「俺様達で良いなら教えるよ？」

「よろしく願います」

そんなこんなで、その次の日。

私は一人で城下町にきていました。

まあ、離れたところで佐助が様子を見ていてくれる・・・らしい。
これで一日何事もなければ、好きなときに城下に遊びに来ても良い
そうです。

つまり・・・最終試験？

「わあ・・・すごい。人もお店もいっぱいある！」

元の世界でも人はたくさんいたけど、それとはちょっと違う感じ。
活気に溢れているというか、和気藹々^{わきあいあい}としているというか・・・。

「あ、お団子売ってる。おみやげに買つてこうかなあ」

その日一日、城下町を見て回ってお団子もちやんと買つて帰る。
城へ戻ると、幸村と佐助が私のことを待ちかまえていた。

「咲夜殿！お帰りでござる」

「お帰り、咲夜ちゃん」

「ただいま。幸村、佐助」

返事をしてから、私は居住まいを正した。

そのままおそろおそろ佐助に採点結果を問いかける。

「佐助、結果は・・・」

「合格だよ。なんにもなかったし、ちゃんとお金も使えてたし」

「おお！」

「やった！」

じゃあ、明日も城下に行こうかな。

草履が欲しいんだよね。

なんて、明日の計画を立て始めていたら佐助から待ったが入る。

「ただし、夕方に城の門が閉まるまでには帰ってくることに。それと、たまに絡んで来る奴もいるからそう言うのに気をつけること。わかった？」

「はい」

今の台詞を聞いてお母さんみたい台詞だなあ。と思ってしまったことは秘密。

そんな、なんてことないある日の日常。

番外編 ある日の日常。二（後書き）

もっと、本当にたいしたことない日常。書いていきたいと思います。
日常を描くのは楽しいです。

あと関係ありませんが、「門限」と言う言葉は江戸時代に由来があるらしいです。

つまり、戦国時代では通じない・・・。

まあ、細かい事は気にしないでください。それがBASARAKオリテイ。

え？違う？まあ、細かい事は気にしない。

ありがとうございました

番外編 ある日の日常。三

私が奥州に来て三日ほど。

伊達軍の方々も、フレンドリーな方が多く・・・すっかり馴染んでいました。

これは・・・良いのかなあ？

私一応、信玄公と幸村に仕える身・・・のハズ。結局、何の連絡も出来ていないし。

「悩んだって、どうしようもないけど・・・」

なんせ、ヘタに『政宗に攫われました』なんて言ったら、戦に発展しかねない。

それはちよつと・・・。

そんなことを考えながら、与えられている自分の部屋の襖を開く。そして、私はそのまま固まることになりました。

「…政宗？」

「……zzz」

「政宗ー？政宗さーん」

返事がない。完全に寝ているようだ。

・・・。

なんで私の部屋で!？

いや、まあココは政宗の城だから、どこで寝ようが勝手なんだろうけど・・・。

どうしよう。これ。

「こじゅさん呼んでくるかな…起こすのもなんかアレだし」

踵を返そうとして、ふと思い当る。

寝顔って、かなりレアだよね？

・・・ケータイで写真でも撮っておこうかなあ。

元の世界に戻った時に記念（？）になるだろうし。

だとすると、他のみんなの写真も欲しいなー。

上田に戻った時は、頼んで撮らせてもらおう。幸村達は私がこの世界の人間じゃないコト知ってるし。

では、記念すべき一枚目♪

「政宗、ごめん！」

スピーカーの所を手でふさいで、音が漏れないようにしてから・・・。

パシャっとな。

よし、保存保存っと。政宗は・・・良かった、起きなかった。

でも、政宗とかは人の気配で目が覚めたりするんだと思ってた。

案外、それでも無いんだ。なんか、ホッとしたような、残念なような・・・。

「さて、こじゅさん呼んでこないと」

音をたてないように、そーっと襖を閉めて、私は、こじゅさんがいるであろう畑へと向かった。

そんな、なんてことないある日の日常。

番外編 ある日の日常。 三（後書き）

ある日の日常です。

のんびり、ゆったりとした日常は、書いていてとても楽しいです。

・・・本編も割とゆるゆるですけど。

ありがとうございました。

番外編 ある日の日常。 四（前書き）

日本刀って一振り約一キロあるらしいですよ…。

番外編 ある日の日常。四

ある日の青葉城。

政宗が六爪の手入れをしている様子を、暇人な私は眺めていました。実は前から・・・それこそBASARAの世界に気になっていたことがあるのですよ！！

今日はそれを確かめようと思っているのです。まず手始めに。

「ねえ政宗。一本持ってみて良い？絶対鞘から抜かないから！」

「ああ。良いぜ」

よし。

許可を貰って、一振りの刀を持ち上げてみる。

おお。予想以上に重い！

次は政宗とか時代劇とかを真似て、両手で構えてみた。

あ、案外イケるぞ？

「……………咲夜？なにやってんだ？」

「ん。ちよつと……………実験？」

怪訝な顔の政宗を横目に、今度は右腕だけで構えてみる。

20秒もしたら腕がプルプルしてきて……………結局一分持たなかった。

「か、刀って一振りでもだいぶ重いんだね……………」

「そりゃ鋼の塊だからな」

「なんで政宗は片手で三振りも持てるの……………。しかも指に挟んで！！」

そう。

“ どうして政宗は片手で三振りも刀を持てるのか ” これが疑問。
『 もしかしたら日本刀って以外に軽い？ 』 と思ったりしたけど、今の実験で違うことが判明したし・・・。

「 俺は鍛えてんだよ。お前、全然筋肉ついてねえだろ 」
「 うゝっ……。おっしゃる通りです…… 」

運動はむしろ好きな方だけど、鍛えたりしたことないし。部活も運動部じゃなかったし。
筋肉なんてほぼゼロですね！

「 政宗はかなり筋肉ついてそうだよね 」

政宗は、と言うかこっちの世界の人は、のほろが正しい気もするけど。

「 まあな。……ほら 」

「 おお、ホントだ！ 」

袖をたくしあげて腕を曲げ、軽く力を入れて見せる政宗。
すごい。何て言うか、こう……。無駄なく筋肉がついてる感じ？

「 へえー。凄いね……。ちょっと、触って良い？ 」

「 of course 」

「 んじゃ、失礼して 」

ペタペタと政宗の腕を触る。

いやあ、男のひとの筋肉なんて珍しくて。お兄ちゃんはやさしかったんです。言っちゃ悪いけど。

「堅いねえ。腹筋も割れてる？」

「あ、ああ……」

「……？政宗、どうしたの？」

「いや……」

政宗が目を泳がせてる。なんで？

私、なんかやった？

「まさむねー？」

「……っ」

顔を覗き込んで、腕をてしてしと叩く。と、視線がスルリと私から外れる。

「まさむ……」

「オイ咲夜？何をやってるんだ……！！？」

あ、こじゅさん」

こじゅさんは、なぜだか少し慌てた感じで部屋に入ってきた。そのまま私は猫にやるように首根っこを掴まれ、ヒョイツと政宗から引き離される。

「小十郎、Nice timing……！」

「政宗様、このような……」

「stop小十郎！今回はかりは俺は無罪だ！」

政宗がこじゅさんに経緯を説明する。かくかくしかじか。その説明を聞いたあと、こじゅさんは眉間にシワを寄せた。あれ……？なんか不穏な空気。

「咲夜」

「は、はい！」

「いいか、今回は政宗様だったから良かったが……」

「は、はぁ……」

「お前はもう少し女としての自覚を……」

「ハイ……」

私、一応男装してるんですが……。反論はしません。恐いから。

それから約一時間。

なぜだかみつちりとお説教をされてしまいました……。。

そんな、なんてことないある日の日常。

番外編 ある日の日常。 五（前書き）

会話文です。 咲夜出てきません。

番外編 ある日の日常。五

「伊達軍・とある新米兵と先輩三人の会話」

「先輩！」

「あ、最近入ったヤツか」

「はい！筆頭と小十郎様の男気に感動しやしたっ！これから真つ当にやってくんで、よろしくお願いします！」

「ああ、元は盗賊だったんだっけ？」

「けど、あんま氣負うことはねえぜ？」

「そうそう。ウチは訳ありなのもけっこういるしなあ」

「ありがとうございまっす！あ、あの。前から誰かに聞きたかったことがあるんす」

「ん？」

「咲夜さんって何者なんスか？」

「「武田の笛師」」

「え？て、ことは伊達の間人じゃないんスか！？」

「ああ」

「そうそう、近いうちに真田が来るらしいぞ」

「それ、俺も聞いた。咲夜さん武田に帰っちゃうのかなあ」

「てつきり俺は筆頭か小十郎様の嫁になつてくださると思つたんだがなあ」

「嫁！？咲夜さん、女なんスか！？」

「それが、よく分からないんだよなあ……」

「いろんな噂があるんだよ」

「どっちにしろ、伊達軍に入ってくれねえかな。咲夜さん」

「咲夜さん来てから、筆頭も小十郎様も、機嫌良いもんない」

「そ……そうなんスか」

（結局謎は深まるばかり。）

（武田軍・ある二人の忍の会話）

「幸村様と長が北へ向かう」

「あら、咲夜サマ迎えに行くのかしら？」

「ああ。俺は長と共に北へ」

「ハイハイ。それじゃ、城の守りはアタシに任せて」

「頼む。他の者達は」

「みいんなシゴトよ。小助と甚八は、じきに帰って来るはずだけど」
「そうか」

「そういえば。咲夜サマの名字も“望月”だけど……ウチの望月と何か関係あるのかしら？」

「さあな」

「不思議な子よね、咲夜サマ」

「そうだな。おなごだと言うのに、幸村様が普通に接しておられる」

「長やお館様も、あつという間に信用してたわねえ。とくに長」

「それだけの『なにか』があるんだろう」

「そうね。……あの方からは血の臭いがしねえ」

「この世界の人間ではないからだろう。だがそれは、害を為さない理由にならない」

「いざとなったら、俺達が」

「無論」

「ま、そうならないことを祈ってるワ」

「……なあ」

「なによ」

「口調を急に変えるのは止めてくれ。気味が悪い」

「あらまヒドイ！真田忍隊一の美貌を自負してるわよ？アタシ」
「……………」

(上司が上司なら、部下も部下)

番外編 ある日の日常。 五（後書き）

ついにやってしまった……。

もしかしたら、じきに武田の忍さんたちが本編にも登場するかもしれません。

生温かく応援して下さい。

ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8149o/>

夜に咲く

2011年12月3日18時00分発行